

# 桜林Ⅱ遺跡

—東横野地区学童クラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

群馬県安中市教育委員会

# 桜林Ⅱ遺跡

—東横野地区学童クラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

群馬県安中市教育委員会

## 序

安中市南部に位置する鷺宮地区は、群馬県の名産であるコンニャクを中心とした畑地が広がり、妙義山を正面に望む景観豊かな農業地帯にあります。

本地区には、鷺宮の名前の由来となった市内でも最も古く創建された咲前神社が鎮座しています。毎年4月1日の例祭で奉納される咲前神社太々神楽は、鷺宮太々神楽保存会と共に安中市指定無形重要文化財に指定され、地元の方々を中心に保存されています。また、本神社周辺では、古くから土器や石器などが採集されていることから、多くの遺跡が眠った地域として知られてきました。

本地区を含めた東横野地区一帯では、土地改良事業、工業団地造成、道路建設などの大規模開発に伴う発掘調査が行われ、本地区の原始古代の歴史解明に寄与するだけではなく、縄文時代の集落や古代の牧、道路といった学術的にも注目される遺跡も発見されています。

今回の発掘調査は、平成27年度に安中市が計画した東横野地区学童クラブの建設工事に伴うもので、桜林Ⅱ遺跡が対象となりました。調査では、調査面積が狭いにもかかわらず、奈良・平安時代の住居址が多数発見され、当初予想されていた集落の広がりを確認するとともに、住居からは、土師器や須恵器、石器、石製品、鉄鎌などの遺物が多数出土しました。その中には「伊」や「彘（喜）」と描かれた平安時代の土器も含まれ、文字資料が少ないこの地域では貴重な発見となりました。

本報告が、歴史を解明する学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、調査にご協力いただいた方々や各関係機関の皆様をはじめ、過酷な気象条件の下で発掘調査に従事していただいた方々には、感謝申し上げる次第です。

平成29年3月

安中市教育委員会  
教育長 桑原 幸正

## 例言

- 1 本書は、安中市保健福祉部子ども課が計画した東横野地区学童クラブ建設事業に伴う桜林II遺跡（遺跡略称：G-50）における埋蔵文化財発掘調査報告書である。  
なお、遺跡名については、平成3年度の市道部分の発掘調査と区別するため「桜林II遺跡」とした。
- 2 桜林II遺跡は、安中市鷺宮字桜林3150-1に所在する。
- 3 本調査のかかる経費のうち、確認調査（平成27年度）は、国庫補助金・県費補助金並びに市単費で実施した。発掘調査（平成27年度）並びに資料整理・報告書作成（平成28年度）は、市単費で実施した。
- 4 調査体制（平成27・28年度）  
安中市教育委員会事務局（調査主体）  
教育長 桑原幸正  
教育部長 田村昌俊  
文化財保護課 課長（参考） 須藤 朗  
埋蔵文化財係 係長（主幹） 千田茂雄（事業総括）  
主査 澤川伸男（平成27年度、確認調査・発掘調査担当）  
主査（文化財保護主事）井上慎也（資料整理・報告書作成担当）  
主査 小川知哉（平成28年度、経理担当）  
主事（文化財保護主事）菅原龍彦  
調査従事者 生駒朝男 今井保美 大月圭子 大手啓子 阪西 武 沢田かずえ 染谷綾子  
田川真知 多胡茂子 多胡 静 多胡栄夫 田島せい子 根岸紀和代 広瀬洋子  
町田千明 宮口知三
- 5 調査期間 確認調査 平成27年5月12日～平成27年5月18日  
発掘調査 平成27年6月24日～平成27年8月10日  
資料整理・報告書作成 平成28年4月1日～平成29年3月31日
- 6 確認調査及び発掘調査は、澤川が担当し、発掘調査では、有限会社毛野考古学研究所との調査管理業務委託に基づき、和久拓が調査員として従事した。
- 7 資料整理及び報告書作成は、井上が担当し、大月、町田、大手、染谷、田川が従事した。また、古代土器実測、観察表作成の一部は、株式会社甲セオリツに委託して行った。
- 8 本書の執筆、編集は、井上が行った。また、報告に際して和久氏、三浦京子氏（古代土器）、神谷佳明氏（古代土器）、高島英之氏（古代土器及び文字資料）にそれぞれご教示をいただいた。
- 9 遺構写真の撮影は、和久、澤川が行った。遺物写真の撮影は、井上が行った。
- 10 現地での基準杭測量、遺構実測図作成等は、有限会社毛野考古学研究所に委託して行った。
- 11 発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。
- 12 発掘調査及び本書の作成に際しては、多くの方々、関係機関等からご指導、ご協力をいただきました。記して感謝いたします。

## 凡　　例

1 遺構の実測図は、住居址・土坑・他遺構1/80、遺構微細図・断面図の一部1/40を基本とした。

本文中で使用した地図は国土地理院発行の地形図「富岡」(1/50000)、安中市都市計画地図(1/2500)、各工事用設計図等を改変して使用した。

2 遺構図中の北マークは座標北である。なお、座標は世界測地系を使用した。

3 遺物実測図の縮尺とマーク等は次のとおりである。

土器：1/4・1/6 石器・石製品：1/2・1/4・1/8 鉄製品・鉄滓：1/2

古代土器の●印は須恵器(酸化焰焼成を含む)を示す。

黒色処理：濃いトーン、灰軸：網トーン、石器磨り・研ぎ範囲：破線、石器敲打範囲：実線

4 土層説明中の記号、略称は次のとおりである。

土層名称及び量の基準：『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)による。

色調 <：より明るい方向を示す(暗く明)

しまり、粘性 ○：あり ◎：ややあり △：あまりない ×：なし

混入物の量 ○：大量(30~50%) ◎：多量(15~25%) △：少量(5~10%)

※：若干(1~3%)

混入物 R P：ローム粒子(溶け込んだ状態) R B：ロームブロック(固まりの状態)

Y P：板鼻黄色輕石(A s-Y P)

5 本文・図面で示す火山灰の名称は、以下の記号を用いた。

浅間A輕石=A s-A 浅間B輕石=A s-B

6 遺構・遺物略称

遺構 H：古代住居 D：土坑・貯蔵穴 P：ピット

遺物 P：土器 S：石器・礫 SE：須恵器

7 遺物番号は、遺物実測図、遺物観察表、写真図版とも共通している。

8 住居主軸は、住居址の長辺方向を基本としたが、竈、炉の位置によって短辺方向としたものもある。主軸方位は北を基準として方位を示した。

9 遺物分布図

遺物分布図の番号は、調査時の遺物取り上げ番号である。また、須恵器にはSEを付け、無いものは土師器とした。微細図の土器・炭化材にはそれぞれトーンを付け、無いものは石器・礫とした。

10 遺構実測図のマーク、トーンは次のとおりである。

土器	10 g	100 g	1,000 g	石器	1個	5個	10個	礫	1個	10個
土師器 环系	■	■	■	白玉	●	◎	◎	○	○	○
土師器 瓢系	●	●	●	防護車	●	◎	◎	◎		
須恵器 环系	○	□	□	編物石	+	+	+			
須恵器 瓢系	○	○	○	台石	■	■	■	回		
須恵器(酸化) 瓢系	●	◎	◎	砥石	■	田	田			
その他の土器(古代)	△	△	△	鐵製品	◆	◆	◆			
				鉄滓	▲	▲	▲			

## 目 次

序

例言

凡例

目次

I 調査の経緯 .....	1
II 調査の方法と経過 .....	1
III 遺跡の地理的・歴史的環境 .....	3
1 地理的環境 .....	3
2 歴史的環境 .....	3
3 層序 .....	7
IV 遺構と遺物 .....	8
1 遺跡の概要 .....	8
2 古墳～平安時代の遺構 .....	8
3 出土遺物 .....	25
V 成果と問題点 .....	43

写真図版 1～12

抄録

## 挿図目次

第1図 事業区域と調査区・トレンド設定図 (1/500) ..... 2	
第2図 安中市の地形と桜林II遺跡の位置 ..... 4	
第3図 鷦宮地区的道路分布図 (国土地理院1/50000「富岡」) ..... 4	
第4図 鷦宮地区遺跡群と六方水 (安中市教委1998を改変) ..... 6	
第5図 基本層序図 ..... 7	
第6図 桜林II遺跡 道構配置図 ..... 9	
第7図 H-1号住居址実測図 ..... 11	
第8図 H-2号住居址実測図 ..... 12	
第9図 H-3号住居址実測図 ..... 13	
第10図 H-5・6号住居址実測図 (1) ..... 14	
第11図 H-5・6号住居址実測図 (2) ..... 15	
第12図 H-7号住居址実測図 (1) ..... 16	
第13図 H-7号住居址実測図 (2) ..... 17	
第14図 H-8号住居址実測図 (1) ..... 18	
第15図 H-8号住居址実測図 (2) ..... 19	
第16図 H-10号住居址実測図 ..... 20	
第17図 H-11号住居址実測図 ..... 21	
第18図 H-12号住居址実測図 ..... 22	
第19図 土坑・ピット実測図 ..... 23	
第20図 H-1号住居址出土土器 ..... 26	
第21図 H-2号住居址出土土器 ..... 27	
第22図 H-3号住居址出土土器 ..... 28	
第23図 H-5・6号住居址出土土器 ..... 29	
第24図 H-7号住居址出土土器 ..... 30	
第25図 H-7・8号住居址出土土器 ..... 31	
第26図 H-8号住居址出土土器 ..... 32	
第27図 H-8・11・12号住居址出土土器 ..... 33	
第28図 H-12号住居址・道構外出土土器 ..... 34	
第29図 石製品・石器 ..... 40	
第30図 鉄製品・鉄滓・織文時代遺物 ..... 41	

## 表目次

第1表 周辺道路一覧表 ..... 5	
第2表 住居址觀察表 ..... 24	
第3表 土坑觀察表 ..... 24	
第4表 土器觀察表 ..... 35	
第5表 石製品・石器觀察表 ..... 42	
第6表 鉄製品觀察表 ..... 42	

## 写真図版目次

図版1 桜林II遺跡 全景	図版5 H-8号住居址 土層堆積状況
桜林II遺跡 調査区全景	H-8号住居址 挖り方断面
図版2 H-1号住居址 全景1	H-8号住居址 瓢箪辺遺物出土状況
H-1号住居址 全景2	H-8号住居址 瓢
H-1号住居址 遺物出土状況	H-8号住居址 地下層堆積状況
H-1号住居址 瓢	H-8号住居址 電極土器埋設状況
H-2号住居址 全景1	H-8号住居址 遺物出土状況
H-2号住居址 全景2	H-8・11号住居址 切り合ひ関係
H-2号住居址 遺物出土状況	図版6 H-10号住居址 全景1
H-2号住居址 瓢	H-10号住居址 全景2
図版3 H-3号住居址 全景1	H-10号住居址 土層堆積状況
H-3号住居址 全景2	H-10号住居址 瓢
H-3号住居址 遺物出土状況	H-11号住居址 全景
H-3号住居址 瓢	H-11号住居址 瓢
H-5・6号住居址 全景1	H-12号住居址 全景1
H-5・6号住居址 全景2	H-12号住居址 全景2
H-5・6号住居址 土層堆積状況	図版7 H-12号住居址 土層堆積状況
H-6号住居址 瓢	H-12号住居址 瓢
図版4 H-7号住居址 全景1	D-1号土坑
H-7号住居址 全景2	D-2号土坑
H-7号住居址 土層堆積状況	D-3号土坑
H-7号住居址 挖り方断面	D-4号土坑
H-7号住居址 遺物出土状況	D-5号土坑
H-7号住居址 瓢	調査状況
H-8号住居址 全景1	図版8 出土遺物 (1) 土師器・須恵器等
H-2号住居址 全景2	図版9 出土遺物 (2) 土師器・須恵器等
	図版10 出土遺物 (3) 土師器・須恵器等
	図版11 出土遺物 (4) 土師器・須恵器等・石製品・石器
	図版12 出土遺物 (5) 石器・鉄製品・鉄滓・織文時代遺物

## I 調査の経緯

平成26年9月30日、市教育委員会（以下市教委という）へ市保健福祉部こども課（以下子ども課という）より、東横野地区学童クラブ建設工事に係る埋蔵文化財に関する照会があった。工事実施区域は周知の埋蔵文化財包蔵地（市№448）内であることから、同年10月6日、工事に先立ち市教委と埋蔵文化財の取り扱いについて協議が必要である旨の意見書を提出した。その後、子ども課との協議を重ねた結果、計画の変更は困難であることから、市教委では工事区域の文化財保護法第94条に基づく発掘通知（以下法94条通知という）の市教委への提出と遺跡の範囲を把握するための確認調査を実施する必要があることを伝えた。

平成27年3月10日、子ども課より必要書類（確認調査依頼書、法94条通知及び発掘承諾書）が市教委へ提出されたが、確認調査については、事業の都合で新年度に実施することになった。その後、子ども課との調査の日程調整等を重ね、同年5月12日から18日まで造成部分と建物部分を対象とした確認調査を実施した。調査の結果、古代の遺構が確認されたため、市教委、子ども課、建築住宅課の3者で埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。協議の結果、当初計画に変更が生じ、グランド部分となる範囲においても表土掘削を行うことになったため、確認された遺構への影響は避けられず、建物部分についても現状保存の措置を講ずることが困難であることから、遺構が確認された部分を対象とした発掘調査による記録保存の措置を講じることで合意となった。同年5月27日、子ども課から発掘調査の依頼が提出され、同年6月22日より市教委による発掘調査を開始した。

なお、発掘調査体制については、現地における専從可能な担当者が確保できないことから、現地作業を円滑に進めるために発掘調査管理補助業務を有限会社毛野考古学研究所へ委託することで対応することとなった。

## II 調査の方法と経過

工事区域は、縄文時代から中世にかけての遺物散布地、集落址として桜林遺跡（市№448）に登録されていたため、事前に古代集落等の存在が予想されていた。そこで、遺構の有無を確認するための調査を平成27年5月12日～18日の間に実施した。調査の方法は、工事区域全体にトレチを7本設定し、バックホー（0.35m<sup>3</sup>）及び人力により遺構確認面としたⅢ層上面までを掘削した後、各トレチ内を人力で精査して埋蔵文化財の有無を確認した。調査の結果をもとに遺構が確認されたトレチを繋いだ範囲を調査区に設定し、遺構が確認されなかった北側と北西角のトレチ周辺は調査対象から除外した。

発掘調査は、同年6月22日～8月10日の間に実施した。調査の方法は、本調査区域に対してバックホー（0.35m<sup>3</sup>）で遺構確認面（Ⅲ層下部からⅣ層上面）まで掘削し、人力でジョレンを用いて遺構確認を行った。発見した遺構は、遺構毎に遺構略称と通し番号を付けた。住居址の調査は、安中市で採用している「分層16分割法」を基本とし、プランが不明瞭あるいは重複した遺構は、サブトレによって遺構の状況を把握した。遺物は、遺構単位で区、層ごとに記録して取り上げた。各遺構の土層堆積図及び微細図の作成は、「ビニール転写法」とデジタル測量を併用して行った。土層断面状況及び完掘した遺構は、リバーサルフィルム（35mm）で写真撮影を行い、記録用としてデジタルカメラによる撮影を

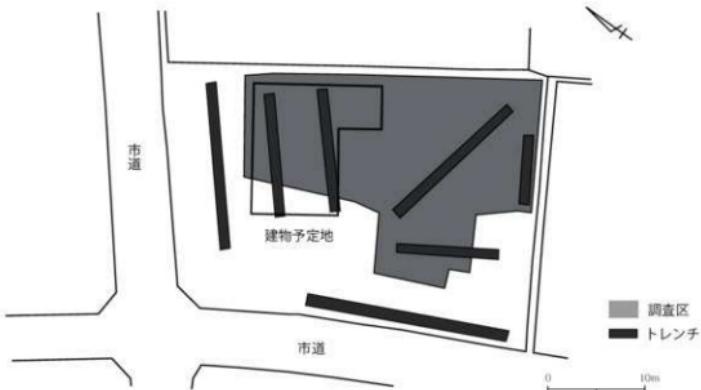
行った。遺構の測量は、調査の進捗に合わせてデジタル測量によって図化し、随時、図面の出力・校正をして完成させた。各遺跡精査終了後、試験的に簡易無線操縦ヘリコプターによる全景写真、俯瞰写真撮影を行った。

グリッド及び基準杭については、調査面積が狭小であることから、通常のグリッドの設定は行わず、遺構測量用として座標北を基準に  $5\text{m} \times 5\text{m}$  を単位としたグリッドを設定し、各測量点を国家座標（世界測地系）に取り付けた。水準点は、工事設計図から現地にある測量杭等を使用して設定した。

発掘調査の経過は、6月下旬に担当者立ち会いのもとでバックホーによる表土掘削を行い、機材搬入、ユニットハウス設置等を行った。7月2日からは、調査員の派遣を受け、遺構確認作業に着手し、8月7日までの約1ヶ月間で遺構の精査、遺構測量・記録等を行った。遺構のうち、H-4、9号住居址の2軒については、遺構確認時の誤認であったため欠番とした。8月7日には、試験的空撮、機材、出土遺物等の撤収を行い、10日付けで安中警察署へ発見届並びに保管証を提出し、全ての現地調査を完了した。7月24日には、地元小学生を対象とした現地説明会を実施した。

資料整理は、平成27年度の発掘調査と並行して遺物水洗い、遺物注記等の遺物整理作業の一部、写真整理を調査期間内で実施した。平成28年度は、資料整理の残りの作業と報告書の作成を4月から開始し、11月まで作業を行った。遺物整理では遺物の注記・選別・分類→遺物台帳作成→土器接合・復元→遺物実測・トレース、遺物観察表作成→遺物写真用土器修復作業→遺物写真撮影等の流れを基本として行った。図面整理では、遺構データ・ファイル編集→遺構図作成・編集→遺構観察表作成→各種版下データの編集等の流れで行った。10月以降は、資料整理と並行して遺構・遺物版下作成、遺物写真撮影、写真版作成、各種表作成・編集、データ編集を行なった。11月以降は、原稿執筆・校正等の報告書作成・編集作業を行った。報告書入稿後は、校正を中心に行い、3月まで作成データの整理、出土遺物の収納整理等を行った。

なお、資料整理及び報告書作成では、パソコン等のデジタル機器を使用して各遺構・遺物のトレース、版下作成・編集、写真整理・図版作成等の作業において効率化を図った。



第1図 事業区域と調査区・トレンチ設定図 (1/500)

### III 遺跡の地理的・歴史的環境

#### 1 地理的環境

桜林II遺跡は、安中市鷺宮字桜林に所在する。本遺跡のある横野台地は、碓氷川南岸に位置し、妙義山から東西に細長く伸びる起伏が緩い地形で上位段丘に区分されている。この台地上には、猫沢川、天神川等の小河川によって開拓された谷地が樹枝状に発達しており、随所で「六方水」と呼ばれる湧水等が存在し、猫沢川へと注いでいる。

本遺跡は、東横野小学校の西、南西から北東方向に向かって伸びる浅い谷地に面した標高219m付近に立地する。

#### 2 歴史的環境

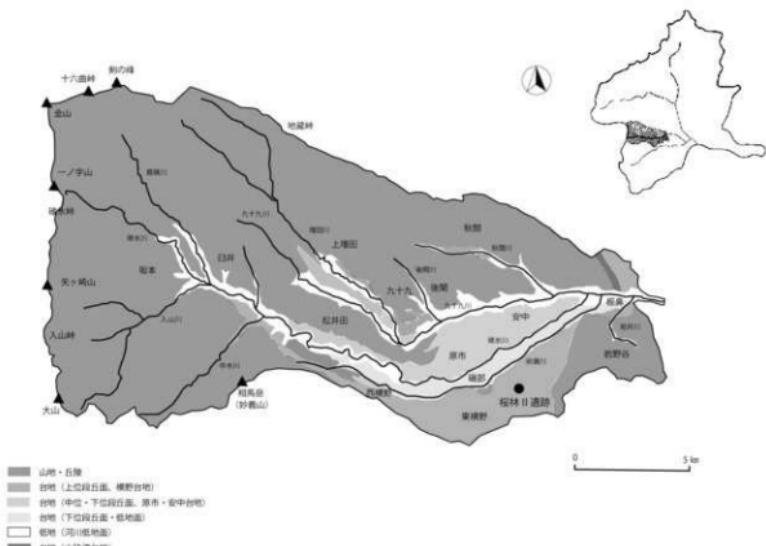
桜林II遺跡は、平成3年度に調査された桜林遺跡と同一遺跡である。本遺跡は、安中市遺跡番号№48（縄文～中世、散布地、集落址、城館址。古墳は除く）に登録されている。

桜林遺跡が所在する鷺宮地区の「鷺宮」の地名の由来は、白鳳年間に創建したと伝えられる咲前神社の旧名「先宮明神」と言われている。この神社周辺では、古くから土器、石器等の古代の遺物や中世の石造物等が多数採集されることから、遺跡が濃密に分布する地域として知られてきた（鷺宮地区遺跡群）。また、台地上に細長く伸びる谷筋の段丘との境には、6カ所の湧水が確認されており、遺跡はこの湧水を取り込むようにして分布する。

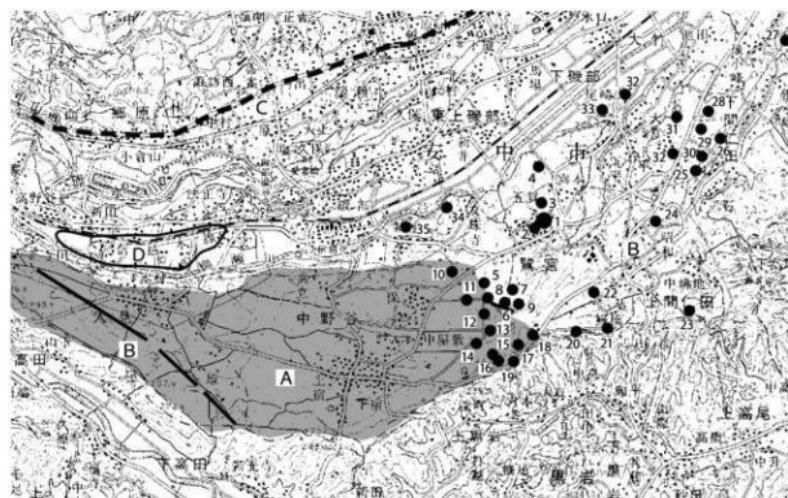
本地区では、他に周知の埋蔵文化財包蔵地（№444、448）内において諏訪遺跡（安中市誌、県№1996）、吹上遺跡（安中市誌）、宮遺跡（安中市誌、県№1997）、上ノ久保遺跡（安中市誌、県№2003）等が知られ、単独では古墳が3基（未調査）分布する。

咲前神社周辺の考古学的調査は、荒神平遺跡をはじめとして、吹上遺跡、五ヶ遺跡、桜林遺跡、上ノ久保遺跡で行われた。いずれも、道路部分を対象としたものであり、遺跡の全体を把握するまでには至らなかったが、予想以上に集落が広範囲にわたることを明らかにできた点で大きな成果を上げることができた。この考古学的成果により、猫沢川左岸の平坦な台地上に縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代の遺跡が分布することが判明した。

鷺宮地区遺跡群の集落は、荒神平・吹上遺跡で弥生時代後期を主体として、古墳時代中期から9世紀前半まで集落の継続が認められた。また、本遺跡の南に位置する上ノ久保遺跡では、弥生時代後期の居住が認められるものの、本格的な集落の形成は6世紀前半以降から開始し、その後、集落規模を拡大縮小しながら11世紀まで継続することが認められた。これら両遺跡の集落のピークは6～7世紀である。これらの遺跡と桜林遺跡及び五ヶ遺跡の集落を含めた集落構造をみると、最初に形成された集落の場所から、時期によって徐々に集落が南へと移動することが明らかとなった。一方、咲前神社周辺の集落の南側に位置する三本木Ⅲ遺跡では、8～9世紀代に限定された集落が単独で形成されており、鷺宮地区遺跡群の西にある横野台地一帯で確認されている牧が存在する立地環境も集落形成に大きくかかわったことが推測できる。本遺跡では、それを裏付けるような規則的に配置される大型掘立柱建物群の遺構や、



第2図 安中市の地形と桜林Ⅱ遺跡の位置



第3図 鷺宮地区の遺跡分布図（国土地理院1/50000「富岡」）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	日	縄文			弥生		古墳			奈良	平安	中世	近世	備考／文献
			草	早	前	中	後	晚	前	中					
1	桜林・桜林Ⅱ		*	*	*						○	○	△		古代集落／市教委1998・本報告
2	五ヶ										○	△			古代集落／市教委1998
3	上ノ久保		*	○	○			○		○	○	○	○		古墳～古代集落・中世館址・和鏡出土／市教委1998
4	荒神平・吹上		△	○	○			○	○	○	○	○	○		古墳～古代集落／市教委1995
5	三木本		*	*	*										市教委1990
6	三木本Ⅱ	*	△	○	△						○	○		△	縄文前期集落・古代道路／市教委1996
7	三木本Ⅲ					*					○	○	△		古代集落／市教委1996
8	落合・落合Ⅱ	*	*	*	*	*	*		△	○	○	○			古代畠井遺構／市教委1990・1996
9	平塚		*							○	○		△		平塚古墳群（終末期）／市教委1996
10	北東・堤下		○	△					○	○					古墳後期集落／市教委1991・1993
11	下塚田		△	*					△	○	○				古墳～古代治鐵遺構・牧区画溝／市教委1990
12	北下原		○							○	○				縄文前期集落・古代牧区画溝／市教委1990
13	落合原		○												縄文前期集落／市教委1990
14	中原		△	○			*	△			○	○			縄文前期集落・古代牧区画溝／市教委1991・1994
15	大下原		○	△			○				△				縄文前期集落／市教委1993
16	吉田原		○												市教委1993
17	注連引原		○			△	○								弥生前～中湖集落／1987
18	注連引原Ⅱ	*	○	*	△	△	○	△	○		○	○	△		弥生前～中湖集落・古代牧区画溝／市教委1988・2003
19	注連引原南					*									市史2001
20	大上		○			○	△				△				弥生中期集落／市教委2003
21	日影		△								△				市教委2003
22	西原		△	○							△				縄文中期集落／市教委2010
23	経塚古墳							○							円墳・竪穴式石室・石製模造品／市史2001
24	道前久保・同Ⅱ		○	○	○						○	○			市史2001・市教委2009
25	日向後原						○				○				古墳前期古墳周囲／市教委1998
26	野毛良				*			○	○	○	○	○			古墳集落／市教委1998
27	山峰		△												市教委1998
28	下原・賽神					○	○	○	○						弥生～古代集落／市教委2005・2011
29	藏畠							○	○						古墳集落・石製模造品／市教委2005
30	藏畠Ⅱ										○				古代集落・石製幣金具・圓畫土器（「參」）／市教委2006
31	諏訪ノ木					○		○	○						弥生・古墳集落／市教委2005
32	座光寺館址										○				方形館・土居・二重塁残存／市史2001
33	尾崎館址										○				方形館・土居・二重塁残存・「尾崎氏」居館／市史2001
34	文殊寺の岱										○				「石尊山の岱」。のろし台／市史2001
35	藏部城										○				山城・堀切・土居・櫓台／市史2001・市教委1976調査・群理文2016
A	牧推定範囲									○	○	○			放牧地と区画施設、廻り・管理集落等／市史2001・市教委1994・2004・2007・2014他
B	古代道路（西須野地区）									○	○				両側側溝をもつ幅約10mの直線道路。奈良初期には廢弛。伝路（郷の道）の可能性あり／町教委2002・市教委2014・2016
C	推定東山道駅跡									○	○				推定ルートは近世中山道と国衝付近の両説あり／市史2001他
D	大王寺地区遺跡群					○	*	○	○	○	○	○	○		磯部郡の中心的集落（握立柱建物群他）・二彩窯・墨書き器・中世大王寺城／町教委1990・2001他

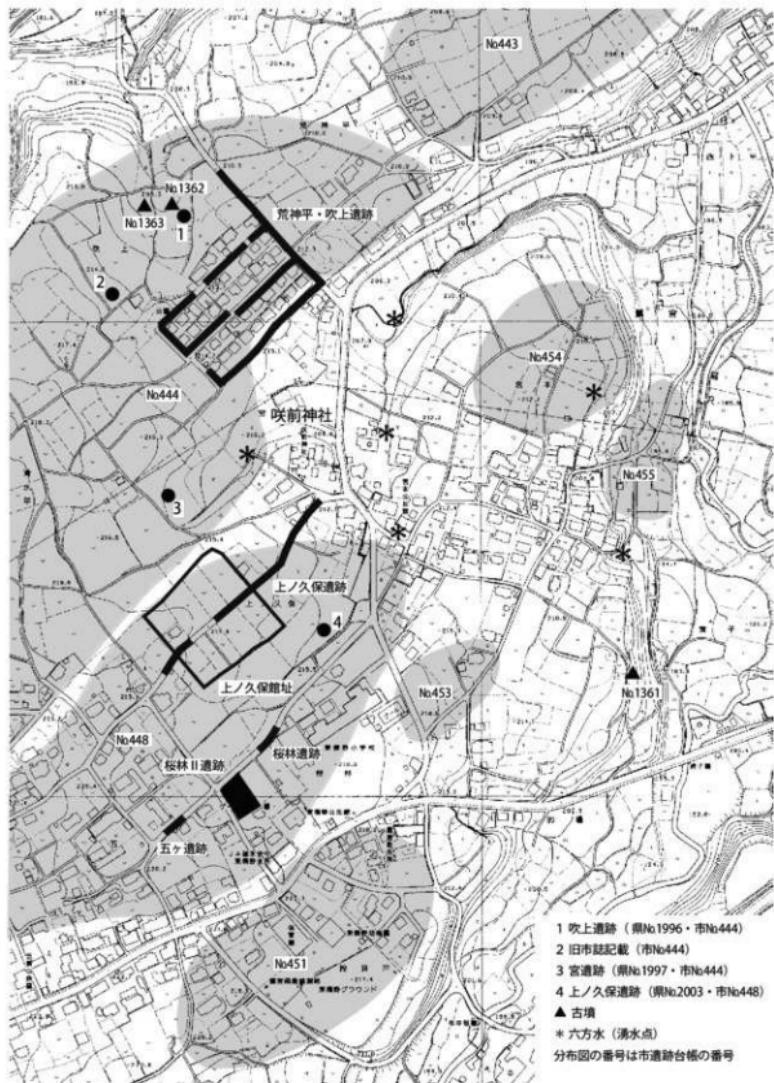
&lt;遺跡凡例&gt; ○：大規模な遺跡（集落跡・古墳等）

○：中規模な遺跡（住居址・牧闘道等）

△：小規模な遺跡（土坑・溝等）

＊：遺物が出土した遺跡

※文献は発掘調査報告書・市史等の刊行年。町教委は田松井田町。



第4図 鶴宮地区遺跡群と六方水 (安中市教委1998を改変)

「中」の墨書き土器、竿秤の錘等といった一般集落とは区別できる遺構、遺物が出土している。咲前神社の東方、谷を挟んだ台地上の丘陵斜面に存在する蔵畠II遺跡では、9世紀後半の集落において「奉」、「山万」の墨書き土器、墨書き棒状礫、石製蛇尾、布目平瓦等寺が出土し、一般的な農村集落とは趣が異なり、周辺で寺院等の存在が想定されている。

なお、この蔵畠II遺跡等が存在する鷺宮地区の東部及び上間仁田地区とその周辺では、弘仁9年(818年)に発生した地震跡と推定される地滑り、地割れ、噴砂等が広範囲で確認されている。この地域では、地震発生後に集落の空白期が認められ、再び、集落が形成され始めるのは9世紀後半以降であることから、地震の影響を直接受けた地域として考えられる。

中世では、咲前神社と関係がある上ノ久保館址(上ノ久保遺跡)、尾崎館址がある。上ノ久保館址の調査では、堀で囲まれた1町歩四方(約100mの方形区画)の規模で、堀内の法面から、松鶴鏡(鎌倉時代)が出土した。また、咲前神社周辺では、板碑や五輪塔等の遺物が探集、確認されている。

近世では、一部の遺跡で天明3年の浅間山噴火による復旧関係の遺構(土坑、溝、灰山等)が確認されている。

#### ◎平成3年度調査の桜林遺跡と五ヶ遺跡の概要

市道に伴う発掘調査で桜林II遺跡の北東にある桜林遺跡では、調査面積220m<sup>2</sup>に対して平安時代の住居址3軒(9世紀2軒、10世紀1軒)・溝1条、中世の溝1条を確認した。桜林II遺跡の南西に位置する五ヶ遺跡では、調査面積160m<sup>2</sup>に対して、平安時代の住居址2軒(10世紀2軒)を確認した(安中市教委1998)。両遺跡で確認された集落は、立地、遺構の分布状況から、桜林II遺跡と同一集落の可能性がある。

### 3 層序

本遺跡の土層堆積は、第5図のとおりである。横野台地では、全域で共通する基本層序が設定されており、本遺跡も概ねこの堆積状況と一致している。遺構確認面となるⅢ層を覆う土層は、I a層を基本とし、部分的にII a層が堆積する。本調査区では、浅間A軽石と浅間B軽石の純層は確認されず、全て土層への混在となっていた。古代の調査では、遺構確認面までの堆積は薄かったものの、耕作等によるⅢ層への搅乱の影響は少なかったため、遺構の遺存状態は極めて良好であった。



第5図 基本層序柱状図

## IV 遺構と遺物

### 1 遺跡の概要

調査区内では、古墳～平安時代の住居址10軒、土坑5基、ピット8基の遺構を検出した。住居址の時期は、床面及び覆土内から出土した土器の年代によって区分したため、土器と遺構との年代に若干の時間差あるいは一致しない遺物（明らかな混入遺物）が一部で認められた。また、本遺跡では、7世紀から10世紀までの遺構のうち、8世紀後半の遺構は検出されなかった。

住居の内訳は、古墳時代後期2軒（7世紀前半1軒、7世紀後半1軒）、奈良時代2軒（8世紀前半1軒、8世紀代1軒）、平安時代6軒（9世紀前半2軒、9世紀後半2軒、10世紀前半2軒）である。

住居址以外の遺構については、土坑、ピットが検出されたが、建物等の柱穴と推定される規則的な配列はみられず、全て単独での検出であった。個々の時期は判然としないが、住居址に並行するものと考えられる。

住居址については、北西斜面に向かって北方向を主軸とするものと斜面に直交させ等高線にそって東方向を主軸とする2方向が認められた。また、住居址の配置は、主軸が一致し、一定の間隔をもって配置するものや時期差のある住居址が重複、あるいは隣接しての配置がみられた。遺構の検出状況から、調査区外にも住居址等が多数分布することが予想されることから、集落は広範囲に及ぶ可能性が考えられる。

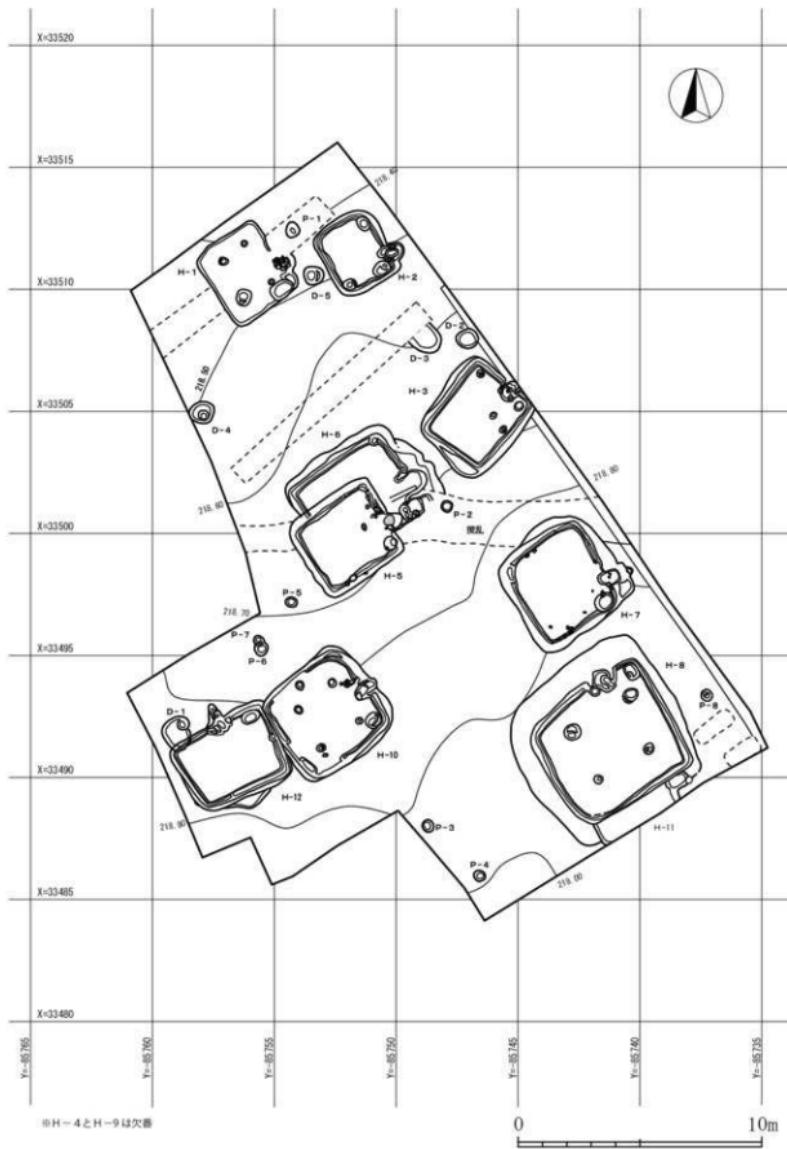
なお、遺構は検出されなかったが、包含層からは、绳文時代中期を主体として前期～後期の土器片と打斧、凹石、剥片類等が少数出土した。同時期の遺物は、上ノ久保遺跡、荒神平・吹上遺跡等で出土していることから、本遺跡の周辺で集落が存在するものと推定される。

### 2 古墳～平安時代の遺構

#### （1）住居址（第7～18図、第2表）

##### ◎古墳時代後期（H-3、12号住居址）

2軒とも平面長方形で、壁溝が全周するが、竈の場所が北ないし東と異なっている。主柱穴は無いが、補助柱と考えられるピットが認められた。竈右脇に貯蔵穴、床面に床下土坑がある。竈は潰れた状態で検出され、地山を削りだして竈体をローム混入土で固め、焚き口上部及び袖には礎を使用して構築している。両住居とも覆土全層に焼土、炭化物が混入することから焼失住居と考えられる。また、覆土中には大量の土器等が廃棄されていた。床面及び竈周辺では廃棄された土器が壊れて検出された。両住居とも隣接する住居址の掘削土で埋められていた。H-3号住居址では、小形甕（32）内から3点の白玉が出土した。H-12号住居址では、覆土上部に前半期の土器が混在し、土器群に時期差がみられた。



第6図 桜林II遺跡 遺構配置図

#### ◎奈良時代（H-8、10号住居址）

H-8号住居址は、平面正方形で、北方向の主軸である。住居縁の地面を浅く掘り窪め外側に開く竪穴住居である。床は全面掘り返して、ローム混入土で埋め戻して床の張り直しが施されている。床下土坑も確認された（2基）。壁際には溝が全周する。柱穴は4本存在するが、全て抜き取られた状態であった。竪右脇には、壁溝に接して貯蔵穴がある。竪は潰れた状態で検出され、その構造は、地山を削りだし、ローム混入土で竪本体を固め、焚き口上部は簾を連結させて構築し、袖には簾が埋め込まれていた。竪前では多数の遺物が出土した。また、床面の南東隅では編物石が散在していた。覆土内には炭化物、焼土が多量に混入しており、床面にも炭化材が検出されたことから、焼失住居と考えられる。遺物は、覆土上部から床面まで複数個体の簾が多数廃棄されていた。覆土上部の一部は、H-11号住居址との重複関係により、9世紀代の遺物の混入がみられた。なお、調査の関係で、掘り方はトレンチ調査のみの確認である。本住居址は、周辺の住居址掘削土で埋められている。

なお、H-10号住居址は、時期を判断できる遺物が少なかったが、住居構造の特徴（4本柱、竪構造等）から8世紀代と推測される。

#### ◎平安時代（9世紀前半：H-7、11号住居址）

2軒とも平面正方形で、東方向の主軸である。H-7号住居址の床面は全面掘り返した後、床をローム混入土で埋め戻して張り直されている。掘り方部分には床下土坑が確認された。壁際には溝が全周する。竪右脇には貯蔵穴がある。竪は潰れた状態で検出されたが、地山を削りだしてローム混入土で竪本体を固めている。竪右脇の礫は、竪袖あるいは焚き口部分に使用されたものと考えられる。住居址は、ローム粒子とブロックを多く含んだ土で埋められている。遺物は床面に至るまで大量に廃棄されていた。13～16区の壁際では床面からやや浮いた状態で鉄滓2点、完形を含む土器が出土した。H-11号住居址は、H-8号住居址を埋め戻した後、住居址のほぼ半分が重なるようにして構築されている。この住居では、潰れた状態の竪のみを検出した。覆土はローム混入土による埋め戻しで、混入した遺物は少量である。

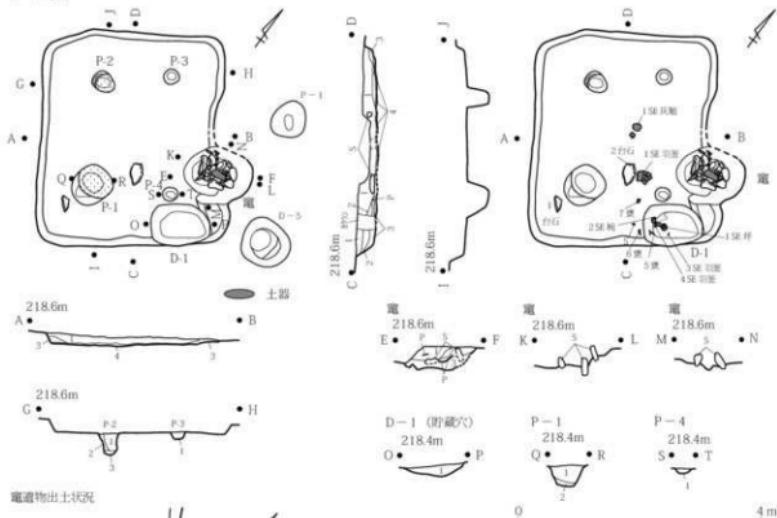
#### ◎平安時代（9世紀後半：H-5、6号住居址）

2軒とも平面長方形で、東方向を主軸とする。H-6号住居址が廃絶され、埋め戻した後にH-5号住居址を構築しているが、廃棄された遺物との時間差は短い。壁際には溝が全周し、竪右脇には貯蔵穴がある。竪は潰れた状態で検出されたが、掘り込みと地山の削り出しのみを確認し、竪本体はローム混入土で固めた簡素化した構造と考えられる。遺物は、特に竪周辺で集中して分布する。H-5号住居址の13～15区等では台石が出土した。

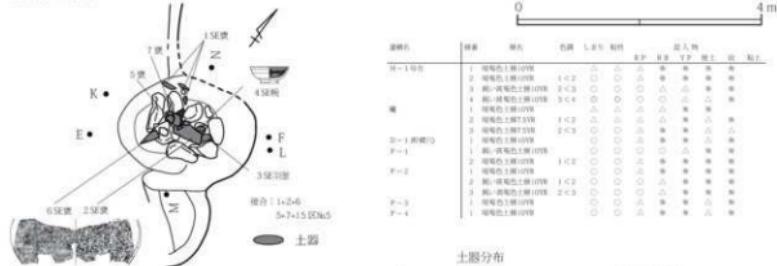
#### ◎平安時代（10世紀前半：H-1、2号住居址）

2軒とも平面長方形で短軸（東）方向を主軸とする。他時期に比べて小型である。H-1号住居址の床面では柱穴が確認された。覆土は自然埋没によるもので、他時期を含む遺物が混在して大量に廃棄されていた。竪右脇には貯蔵穴があり、H-2号住居址の床面では別の土坑が検出された。竪は潰れた状態で検出されたが、構造を把握できる状態ではなく、土坑状に掘り込んだ場所にローム混入土で竪本体を構築したものと考えられる。竪内には多数の礫があることからこれらが構築材であった可能性がある。

H-1号住



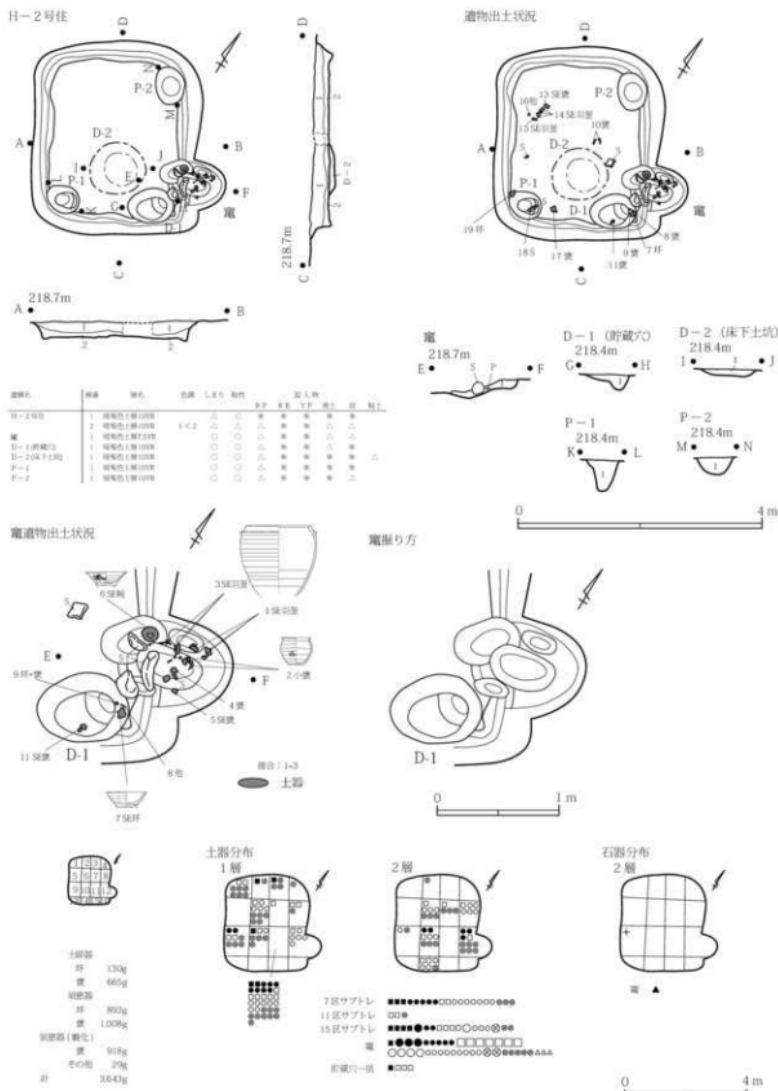
遺物出土状況



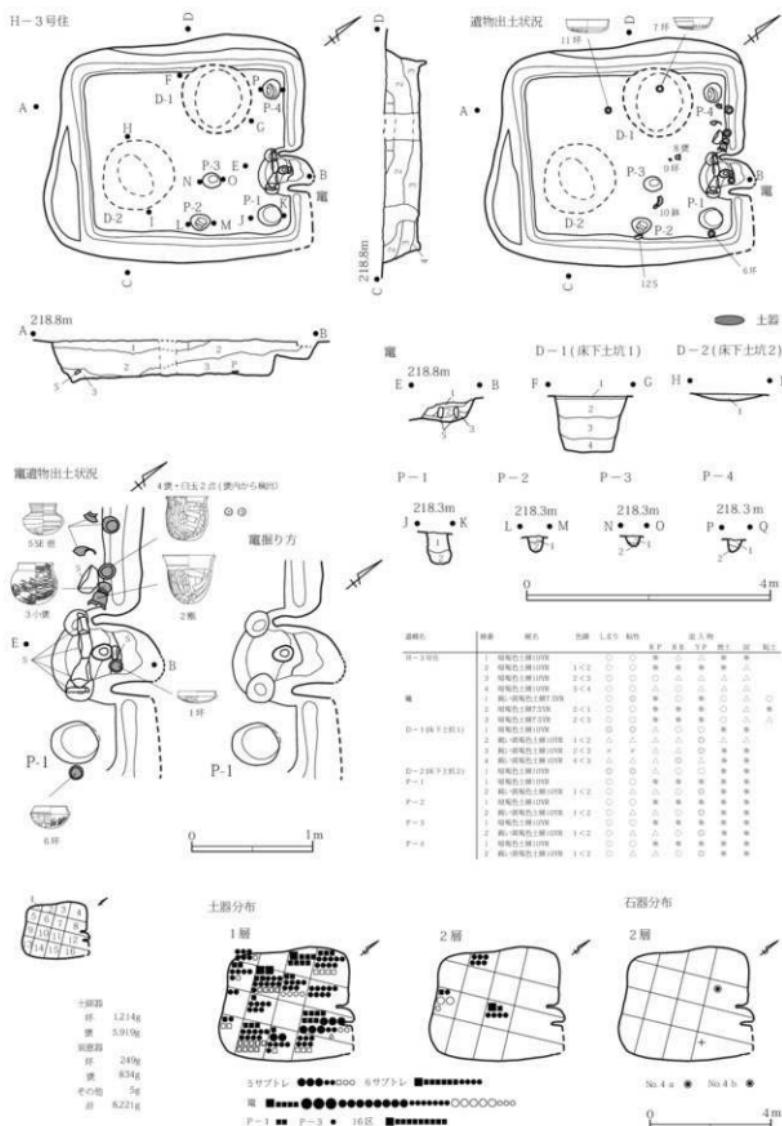
電掘り方微細図

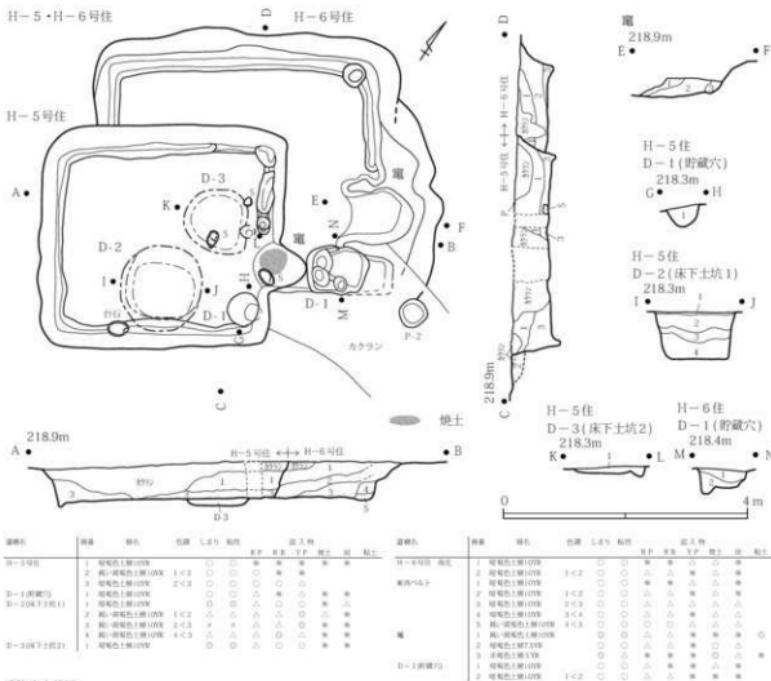


第7図 H-1号住居址実測図



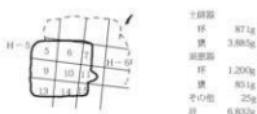
第8図 H-2号住址実測図



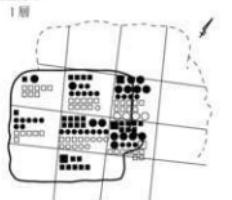


第10図 H-5・6号住居址実測図(1)

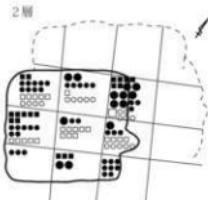
H-5号住



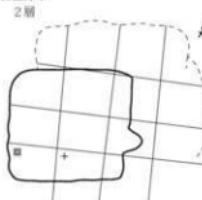
土器分布



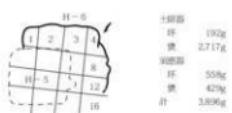
2層



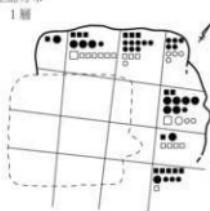
石器分布



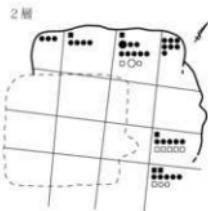
H-6号住



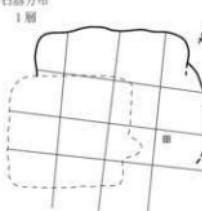
土器分布



2層

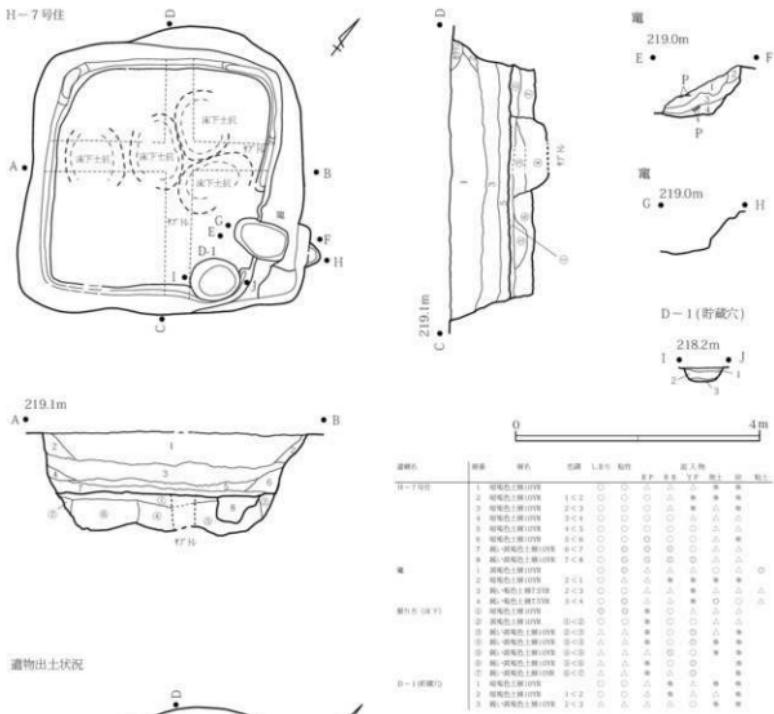


石器分布

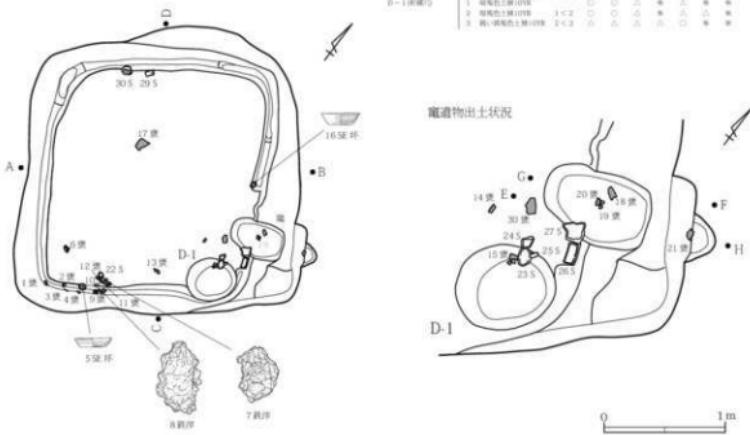


0 4m

第11図 H-5・6号住居址実測図(2)

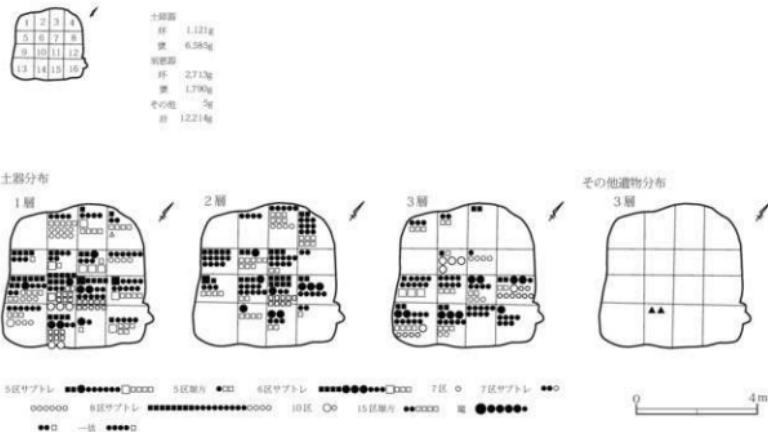


### 遺物出土狀況



第12図 H-7号住居址実測図(1)

H-7号住



第13図 H-7号住居址実測図(2)

また、竪内には土器片が廃棄されていた。

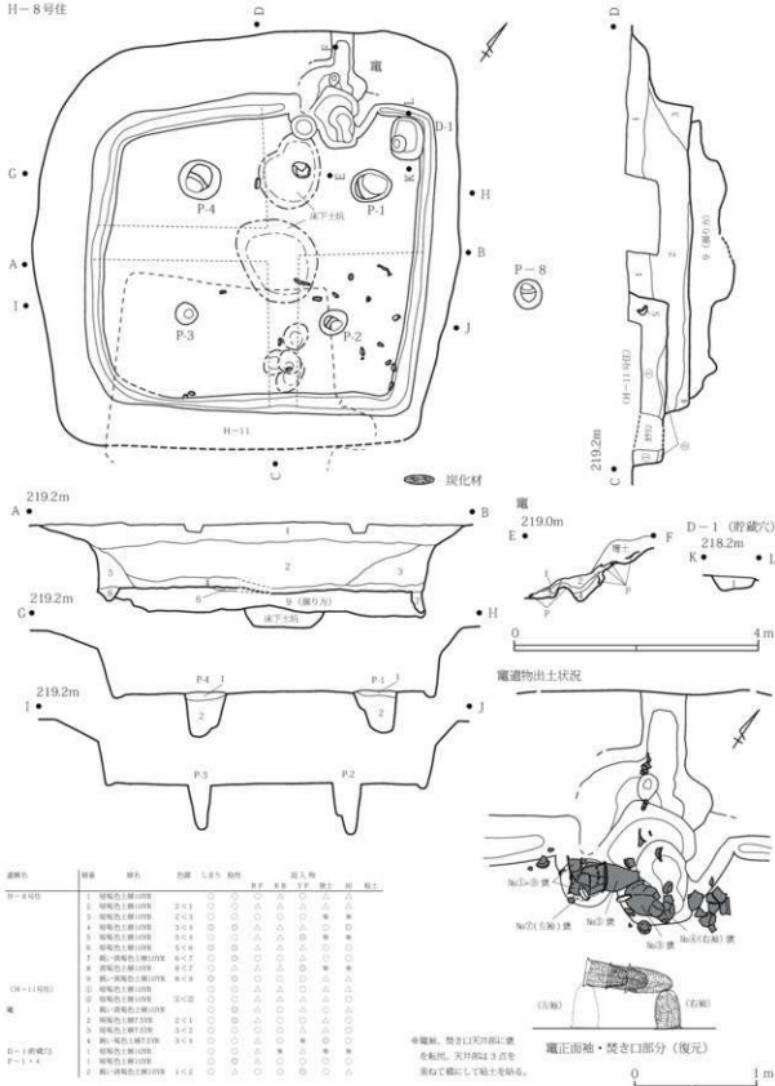
(2) 土坑(第19図、第3表)

浅間B 軽石を含まない土坑が5基検出された。形態は、平面横円形、断面は皿状で浅い。覆土は全て暗褐色土である。土坑内からは、土師器、須恵器の小破片が出土したが、土坑の性格を把握できる遺物は出土しなかった。時期は、住居址の時期と並行する（1108年以前）

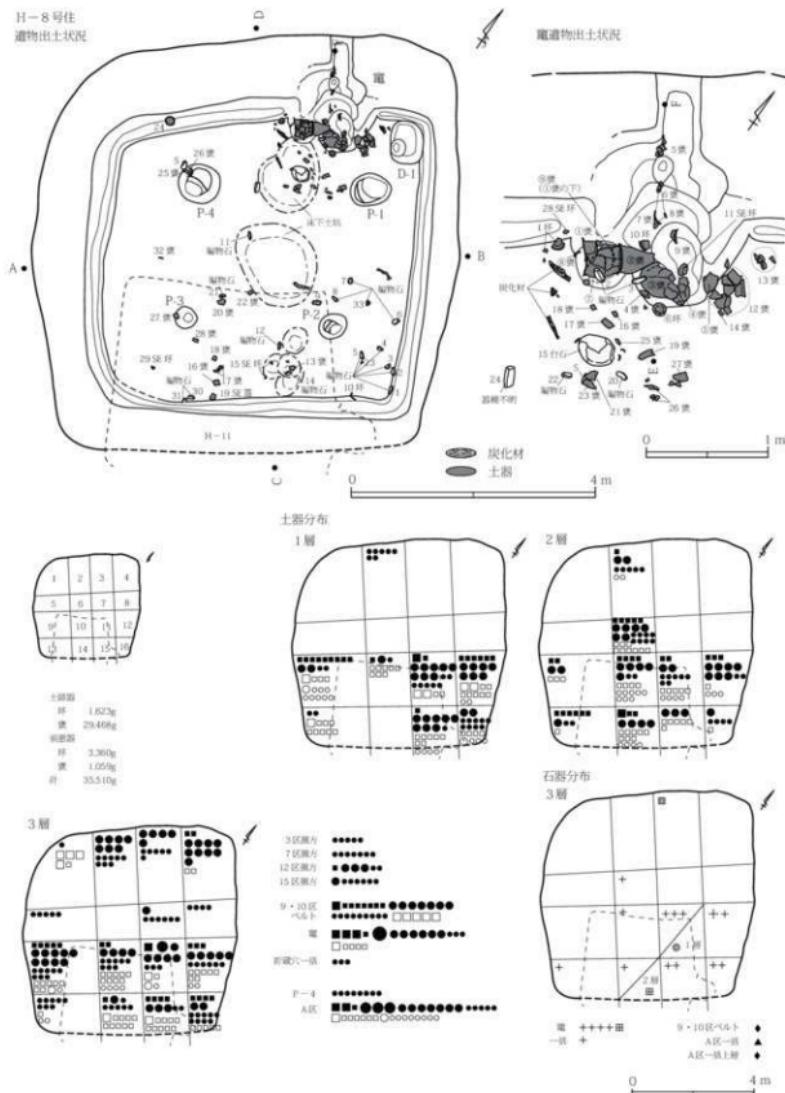
### (3) ピット(第19図)

覆土に浅間B軽石を含まないビットが8基検出された。形態は、平面円形、断面筒状で深いのが特徴である。3基のビットで土師器の破片が出土した。ビットは、全て単独検出であり、柱穴としての配列には規則性がないため、遺構の性格は不明である。時期は、住居址の時期と並行する（1108年以前）。

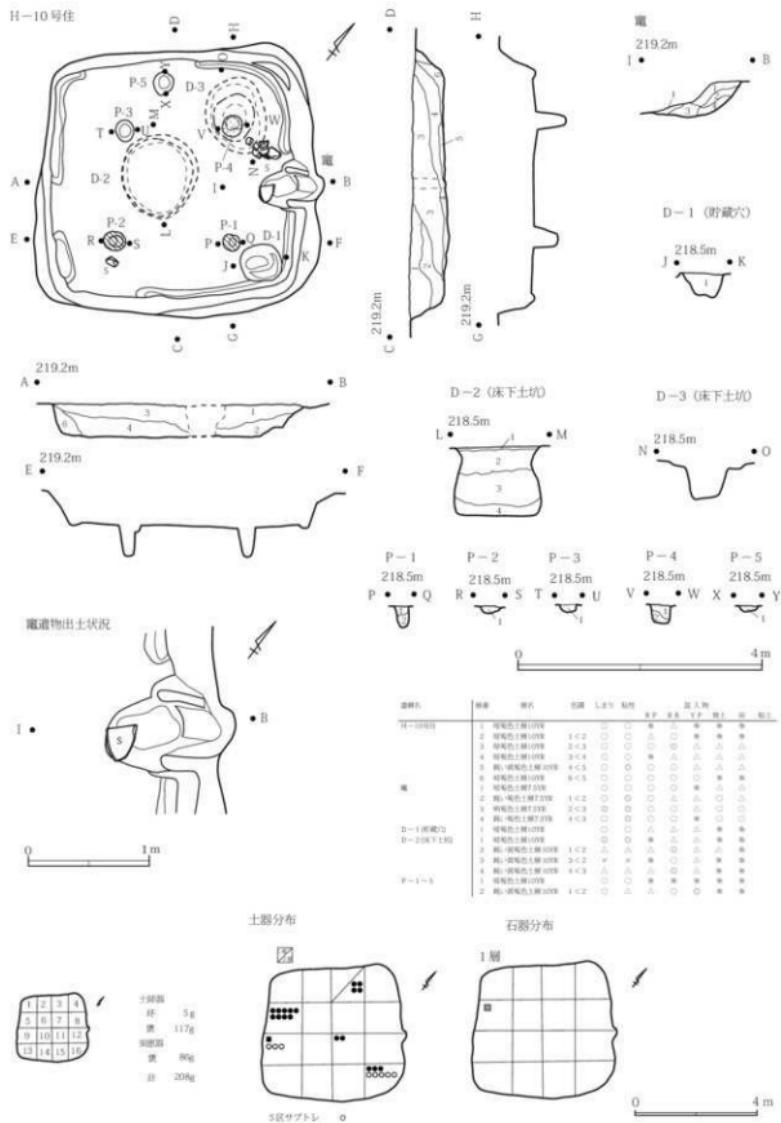
H-8号住

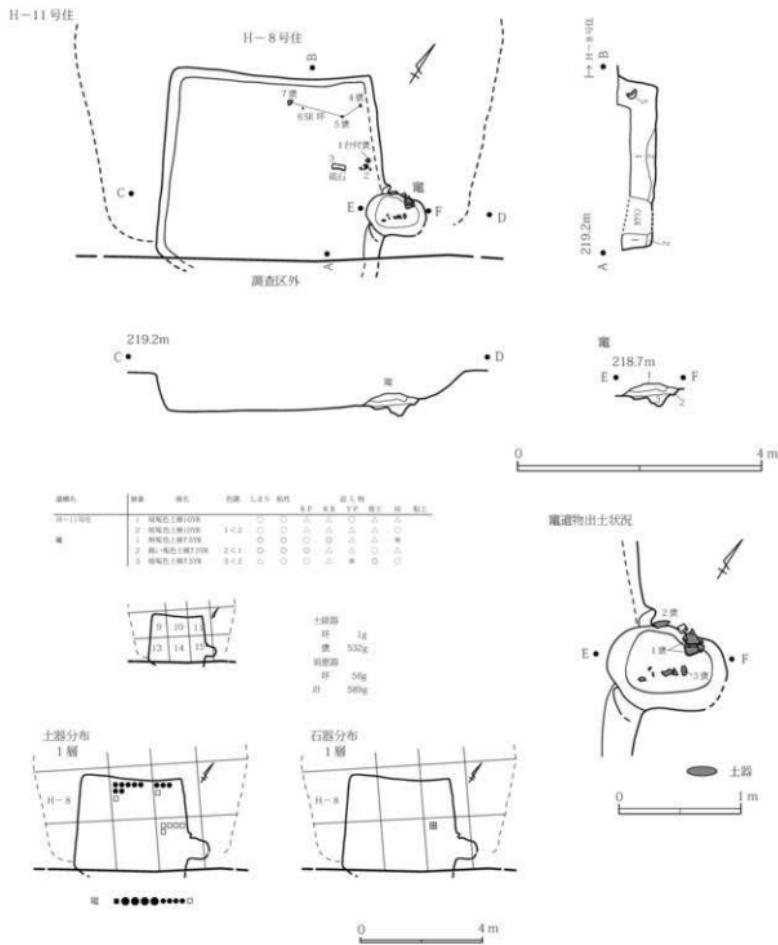


第14図 H-8号住址実測図(1)

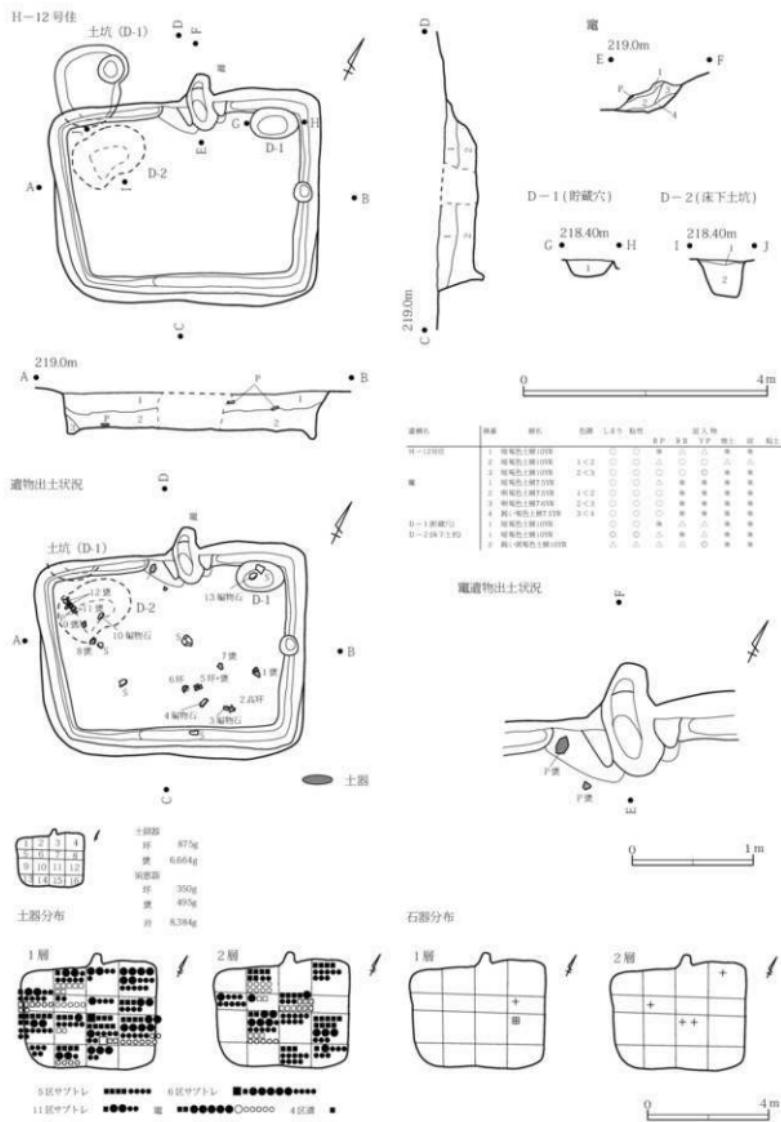


第15図 H-8号住居址実測図(2)

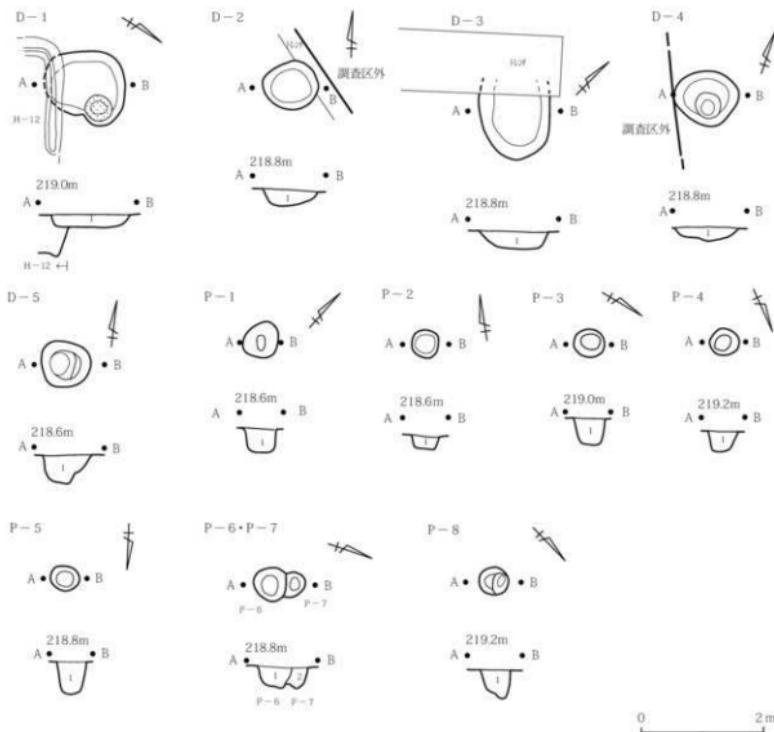




第17图 H-11号住居址实测图



第18図 H-12号住居址実測図



第19図 土坑・ピット実測図

第2表 住居址観察表

遺構名	平面形態	面積(m)			主軸方向	壁面溝	窓穴	柱穴	遺物		施設		床下土坑	時期	備考
		主軸長	副軸長	深さ(Nから)					石器	他	位置	構造			
H-1	小型 扇形A	3.01	3.51	0.32	54°-E	なし	D-1	不明	上部△ 底部○ 腰溝△	石器串 鉄斧串	施設や中窓等の 構造。	粘土・東石付の腰溝(山 田り込み)、腰溝に土 被用。	なし	10世紀前半	床面に台石2点。D-1 内及び外縁から遺物 出土。
H-2	小型 扇形B	2.56	3.23	0.28	81°-E	なし	D-1 P-1 P-2	なし	上部△ 底部○ 腰溝△	石器串 鉄斧串	施設や中窓等の 構造。	粘土・腰溝(山 田り込み)、腰溝に土 被用。底面土苔付 物。	なし	10世紀前半	地面上に遺物有り。基 盤、側面土苔出土。床 面に遺物が散在。
H-3	小型 扇形A	4.03	3.63	0.58	39°-E	全周	P-1	なし	上部○ 底部△ 腰溝△	石器串 石器串	施設や中窓等の 構造。	粘土・腰溝(山 田り込み)、腰溝に土 被用。底面土苔付 物。	なし	10世紀前半	地面上に小型腰溝の土 被用(中)・腰溝(側)。小 型窓(下)での骨器製 造跡。
(H-4)															欠番。
H-5	中型 扇形A	4.02	3.69	0.60	58°-E	全周	D-1	なし	上部○ 底部△ 腰溝△	石器串 鉄斧串	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み。	2基 (D-2+3)	9世紀後半	H-1台と並用。床面 に台石。
H-6	中型 扇形A	5.04	4.28	0.52	58°-E	全周	D-1	なし	上部△ 底部○ 腰溝△	石器串 鉄斧串	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み。	なし	9世紀後半	H-1台と並用。腰溝 に土被用(側)。腰溝 に排水溝の痕跡(?)と 鉄器出土。
H-7	中型 正方形	4.47	4.42	0.66	57°-E	全周	D-1	なし	上部○ 底部△	石器串 鉄斧串	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み。	4基 (A-D)	9世紀前半	H-1全面開拓り(腰溝 を除く)。D-1は、 床面に遺物有り(D-1、腰溝 等)。
H-8	小型 正方形	3.40	3.47	1.04	35°-W	全周	D-1	4本	上部○ 底部△ 腰溝△	石器串 石器串 石器串 腰溝△	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み。 壁さく天井。神に土臺 (腰)。軋用。	2基 (D-2+3)	8世紀後半	H-1全面開拓り(腰溝 を除く)。腰溝に土 被用(側)。大木脚1点。
(H-9)															H-12台の一部。欠 番。
H-10	中型 正方形	4.55	4.45	0.60	53°-E	部分	D-1	4本	土制串 瓦器串	石器串 石器串	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み 角。大木脚1点。	2基 (D-2+3)	8世紀後半	腰土は壁の同じ。床 面、腰溝付少ない。 地面上に石灰沈出。
H-11	小型	2.07	2.05	0.60	57°-E	なし	不明	不明	上部串 瓦器串	石器串 石器串	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み A。	不明	9世紀前半	H-1台を基礎床として 構成。
H-12	中型 扇形B	3.57	4.47	0.60	23°-W	全周	D-1	なし	上部○ 底部△	石器串 石器串	施設や中窓等の 構造。	粘土(地)山田り込み。	1基 (D-2)	7世紀後半	D-1台と並用。腰土は 壁の同じ。腰溝上部に 石器串の底面反ら。

凡例 平面形：小字：4m未溝 中型：4~6m 大型：6m以上。長方形A：主軸側が長い、長方形B：副軸側が長い。

土被重量 番：~100g △：~1000g ○：~5000g ◇：5000g以上。

遺物 番：1~5点 △：6~10点 ○：10点以上

&lt; &gt;：残存領域

第3表 土坑観察表

遺構名	上端幅員(cm)	下端幅員(cm)	深さ(cm)	平面形態	断面形態	土被重量	時期	備考
B-1	130	105	110	81	10	楕円形	輪底形	上部串 瓦器串 古代 H-12台と並用。
B-2	87	78	62	55	28	楕円形	輪底形	上部△ 瓦器串 古代
B-3	1060	116	930	78	27	楕円形	輪底形	上部△ 瓦器串 古代
B-4	106	90	75	60	31	楕円形	輪底形	上部串 瓦器串 古代
B-5	82	75	51	45	44	円形	輪底形	上部串 瓦器串 古代

凡例 土被重量 番：100g以下 △：100~500g ◇：500~1000g &lt; &gt;：残存領域

### 3 出土遺物

#### (1) 土器 (第20~28図1~107、第4表)

##### 7世紀の土器群 (前半: H-3号住居址、後半: H-12号住居址)

土師器模倣壺には、口縁が内側に屈曲するもの、やや外反するもの、有段となるもので体部はヘラ削りにより整形し、内面を鏡磨き、黒色処理する壺もある。須恵器高壺は底部にカキ目調整が施される。須恵器环蓋は内面調整が粗い。土師器甕は、口縁がくの字となる外面縦位の箝削りが主体である。

##### 8世紀の土器群 (前半: H-8号住居址)

H-8号住居址において竈付近で一括資料が得られた。なお、H-11号住居址との重複関係から、覆土上層の一部で9世紀代の土器が混在する。土師器壺は口縁部撫で、体部箝削りの調整が施される。須恵器壺は底部切り離し後に小さな高台が取り付けられる。須恵器蓋の摘みは、宝珠または環状となり、蓋内側の縁辺にはカエリがある。土師器壺は整形技法に時期差はみられないが、口縁部が直立またはやや外反し、体部底面がやや平坦となる。土師器甕は、古墳時代の伝統をもつ胴部に縦位箝削りを施すものと、武藏型甕の初現的な斜位の箝削りを施す両者が認められた。

##### 9世紀の土器群 (前半: H-7・11号住居址、後半: H-5・6号住居址)

前半と後半の2時期に細分される。前半(H-7、11号住居址)では、壺の他に高台付壺が組成する。底部切り離しは、この時期に多い右回転糸切り技法によるものが主体で、周辺は無調整、鏡切りされる。甕は武藏型に分類され、胴上半が斜位または横位の箝削り、胴下半が縦位の箝削りによる整形となる。甕の頸部はやや浅いくの字状から、後半(H-5、6号住居址)では「コ」の字状へと変化する。この時期の甕は、器厚が薄く、胴部が張るものが多い。釉が付着する平瓶の破片が出土した。

##### 10世紀の土器群 (前半: H-1、2号住居址)

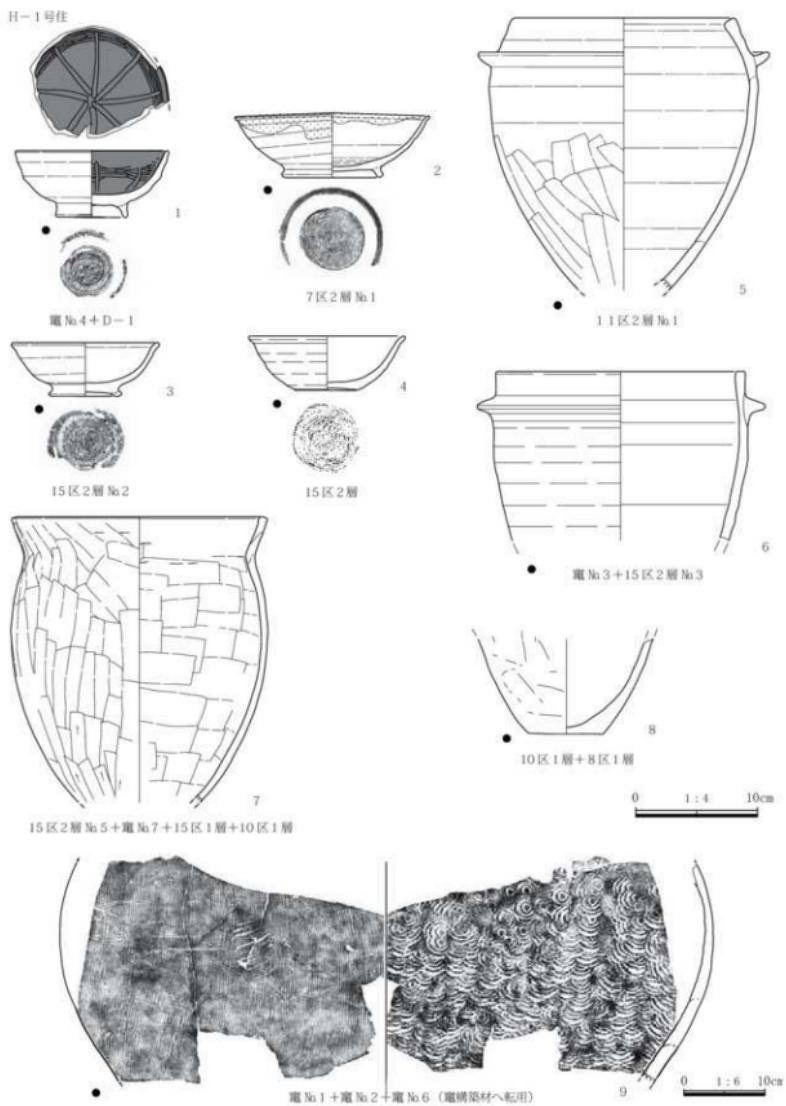
須恵器は、還元焰が減少し、赤褐色系の酸化焰が主体となり、整形は、塊(壺)系、甕系とともに輪轂整形が多くなる。文字資料は3点出土し、判読できるものは、「伊」(須恵器塊の両面に墨書き)、「昂(喜の異字体)」の2点、判読不明なのが1点である。甕類には武藏型甕の器形、整形技法を引き継ぎ、依然として土師器製作技法の伝統が残る。また、刻書のある小形甕(酸化焰)は、底部切り離し技法が左回転であり、在地の秋間古窯跡群ではみられない技法であることから、県北部の月夜野古窯跡群等の他地域からの搬入の可能性が考えられる。高台が付く塊類には、内面黒色処理と暗文状の鏡磨き調整が施される塊、灰釉陶器等が組成する。この段階では、足高高台に近い塊が組成するが主体的ではない。羽釜は、酸化焰焼成が主体となり、全体が輪轂整形によるものと胴下半部を箝削りするもの(吉井型)が存在する。灰釉陶器は、上野国内で流通が認められる東海地方の窯元からの搬入品と考えられる。

なお、H-3号住居址覆土からは、9世紀代と推定される施釉陶器の小破片1点が出土した。

#### (2) その他の遺物 (第29~30図1~23、第5表)

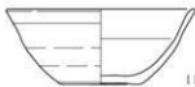
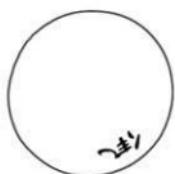
1~3は滑石製白玉、4は滑石製紡錘車、5~9は流紋岩製(砥沢産)の金属器の研磨痕が残る砥石、10~13は台石である。14は鉄製の曲線刃鎌である。鉄滓(15~20)は住居址覆土から出土した。

遺構外の遺物では、繩文土器(前期、中期、後期)、石器(石匙、打製石斧等)が少数出土した。21は加曾利EⅢ式の深鉢片、22は加曾利B1式の浅鉢片、23は繩文時代の頁岩製縦形石匙である。

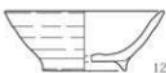


第20図 H-1号住居址出土土器

H-2号住



9区No.19



12



7



13



電内



10



電No.6



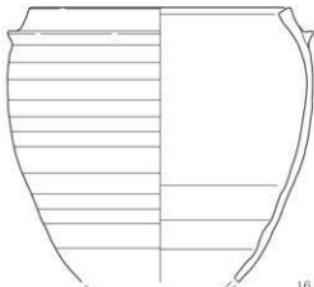
11区1層



15

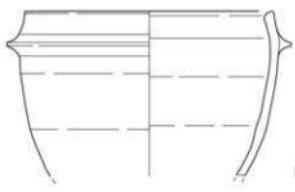


電2



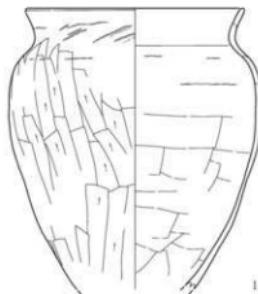
16

電内+電No.1+電No.3a

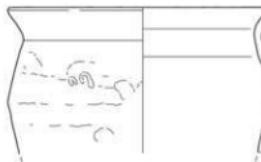


17

5区No.14+5区No.15+6区1層



18



電No.3b+12区2層

19



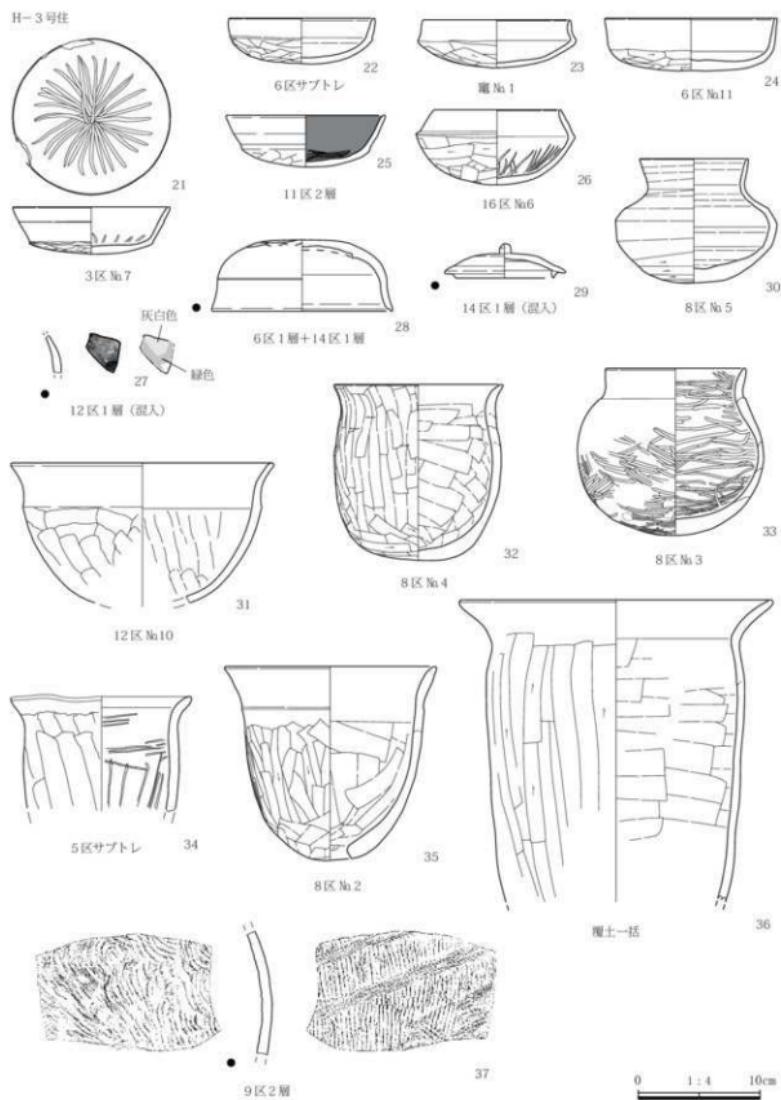
7区サブトレ

20

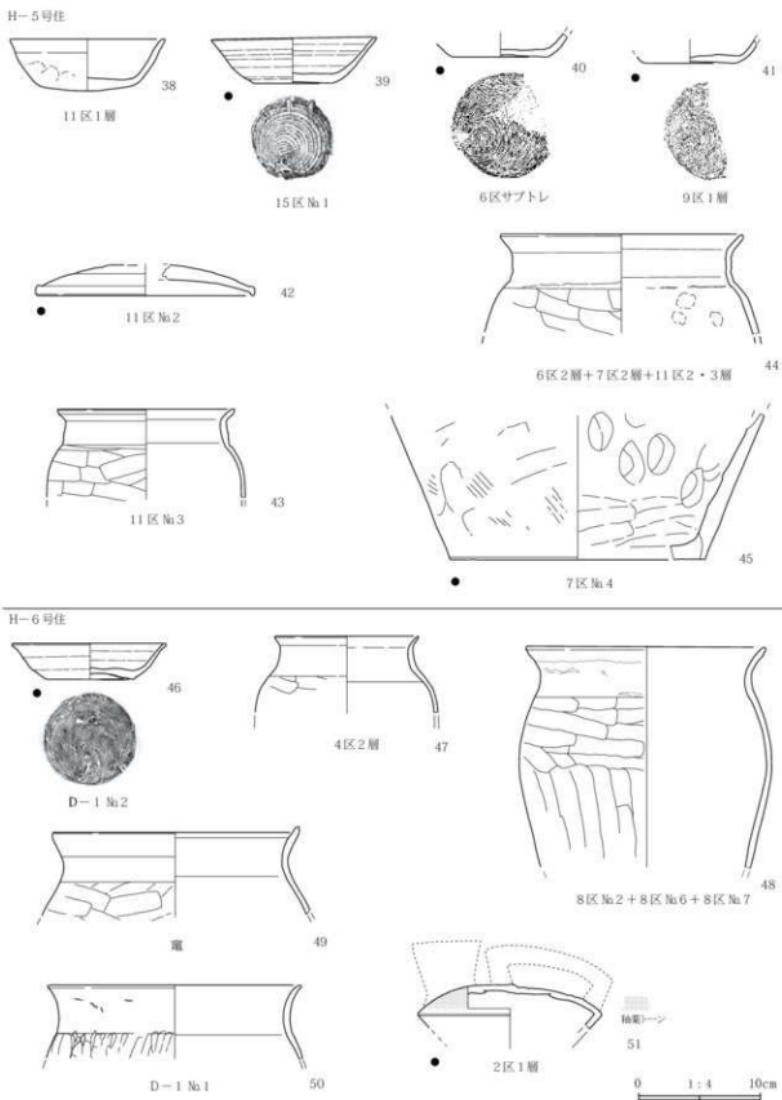
電No.10+7区サブトレ+11区1層+15区サブトレ+10区2層+9区1層



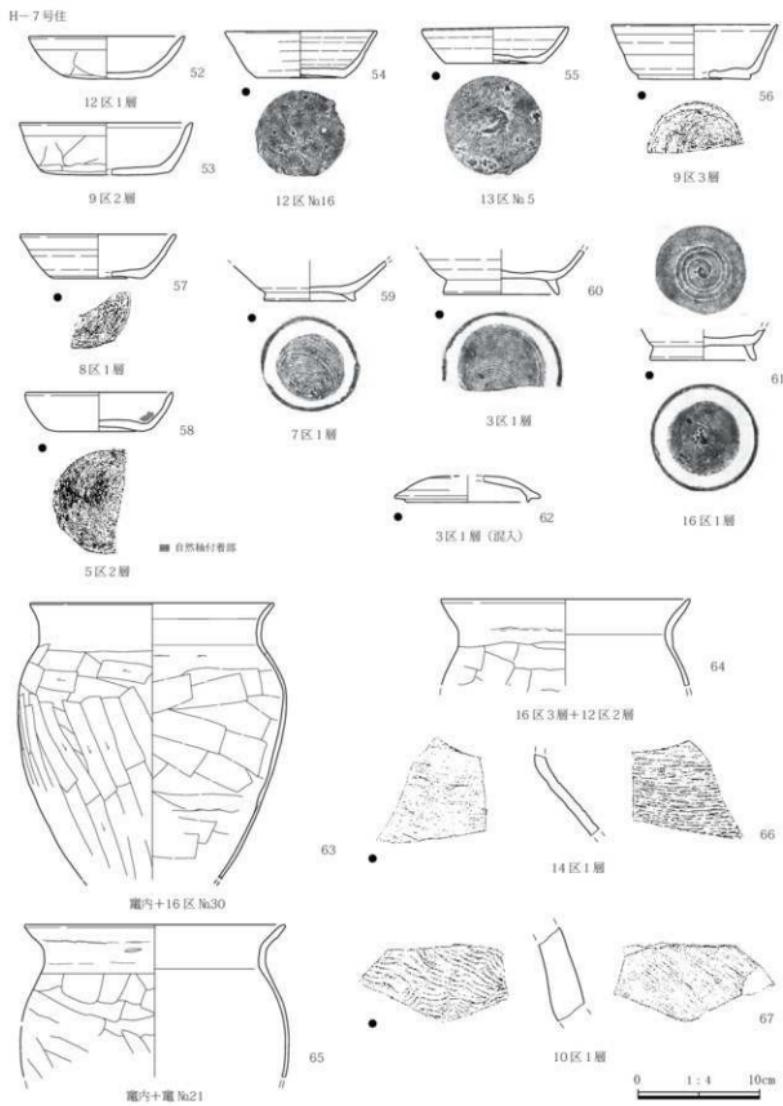
第21図 H-2号住居址出土土器



第22図 H-3号住居址出土土器



第23図 H-5・6号住居址出土土器



第24図 H-7号住居址出土土器

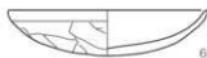
H-7号住



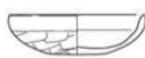
6区No17

68

H-8号住



69

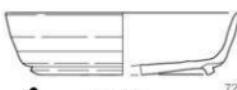


70

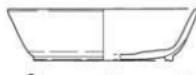


71

龜No⑨+A区中層



72



73



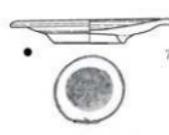
11区1層 74



15区No10



龜No⑩



75

3区上層(混入)



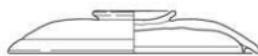
A区中層

76



1区No24

77



14区No19

78



12区1層

79



80

11区No2+11区下層



3区下層

81



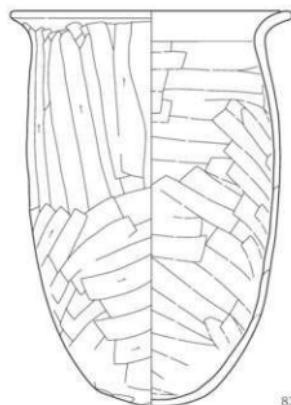
11区3層

82

0 1:4 10cm

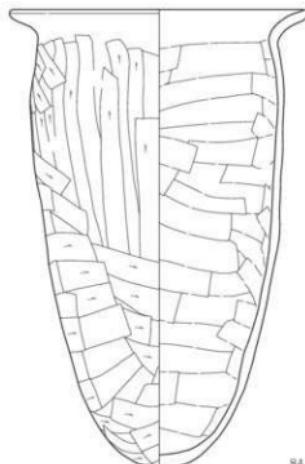
第25図 H-7・8号住居址出土土器

H-8号住



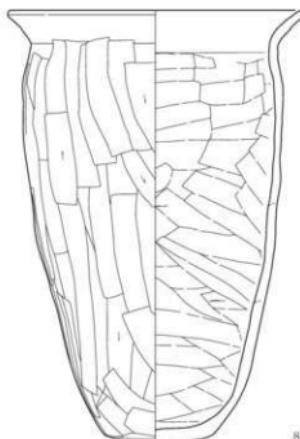
83

竈 No.④



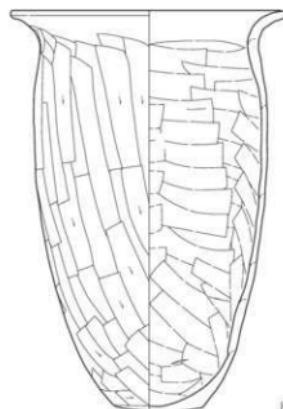
84

竈 No.③



85

竈 No.①+②



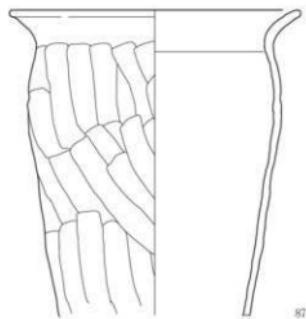
86

竈 No.②

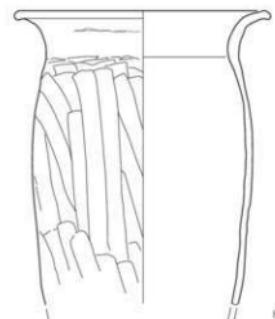
0 1 : 4 10cm

第26図 H-8号住居址出土土器

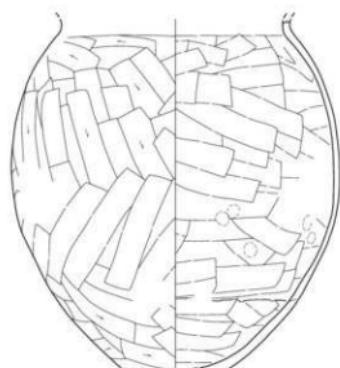
H-8号住



窓内+A区中層

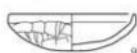


A区中層



4区No12+3区No17

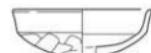
H-12号住



12区2層



11区No6



9区1層



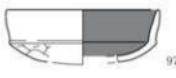
0 1 : 4 10cm



8区1層



6区サブトレ

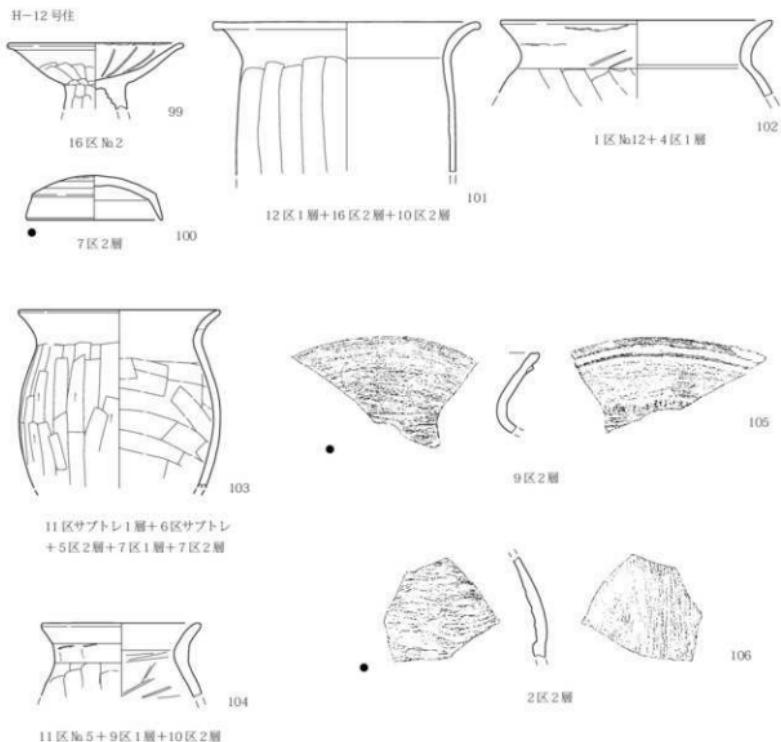


15区No2



11区1層

第27図 H-8・11・12号住居址出土土器



遺構外

A区一括

0 1:4 10cm

第28図 H-12号住居址・遺構外出土土器

第4表 土器觀察表

番号	地名	標本名	区	層	種類	法面(m)	口徑	深さ	堆成	色調	地化	風化	或・断続性付特徴		内面	外面	風化	風化特徴、風化の程度、切引り、	風化特徴、風化の程度、切引り、
													風化	風化					
1	H-1	■ D <sub>4</sub>	東山(原田山)	層	12.4	(0.5)	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	1/2	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
2	H-1	7	2.Su1	東山山腹	層	15.8	7.6	5.3	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
3	H-1	15	2.Su2	東山山腹	層	11.8	5.2	4.4	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
4	H-1	15	2.Su3	東山山腹	層	12.8	4.6	4.5	無	灰褐色	褐色	褐色	2/3	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
5	H-1	11	2.Su4	東山山腹	層	14.0	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
6	H-1	15	2.Su5	東山山腹	層	12.0	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
7	H-1	15	2.Su6	東山山腹	層	10.1	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
8	H-1	15	2.Su7	東山山腹	層	8.1	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
9	H-1	■ D <sub>2</sub>	東山山腹	層	—	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
10	H-2	■	東山山腹	層	—	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
11	H-2	9	■ D <sub>2</sub>	東山山腹	層	11.5	6.0	6.2	無	灰褐色	褐色	褐色	1/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
12	H-2	■	東山山腹	層	13.0	6.8	5.0	無	灰褐色	褐色	褐色	1/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化	
13	H-2	■	東山山腹	層	—	—	8.5	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
14	H-2	11	1	東山山腹	層	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
15	H-2	■	東山山腹	層	—	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
16	H-2	■	東山山腹	層	—	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
17	H-2	6	1	東山山腹	層	20.5	—	13.4	無	灰褐色	褐色	褐色	1/2	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
18	H-2	7	■ D <sub>2</sub>	東山山腹	層	17.6	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
19	H-2	11	1	東山山腹	層	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
20	H-2	15	■ D <sub>2</sub>	東山山腹	層	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
21	H-2	10	1	東山山腹	層	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
22	H-2	9	■ D <sub>2</sub>	東山山腹	層	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化
23	H-2	7	■ D <sub>2</sub>	東山山腹	層	—	—	—	無	灰褐色	褐色	褐色	3/4	無風化、風化の程度、切引り、	無風化、風化の程度、切引り、	無風化	無風化	無風化	無風化

特徴番号	通称名	区	場	種類	群種	法量(m)	口渡	底質	幼虫	成虫	成・雑形段生の特徴		内面	備考		
											胸	腹	胸足	脚		
19	H-2	12	2	上遊部	奥	(2.2)	—	(12.0)	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
20	H-2	7	W/H	底原田	小切葉	(2.2)	—	(7.0)	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
21	H-3	3	No7	上遊部	坪	12.8	10.2	3.8	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
22	H-3	6	W/T	上遊部	坪	11.9	—	3.7	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
23	H-3	■	No1	上遊部	坪	12.0	—	3.9	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
24	H-3	6	No11	上遊部	坪	14.0	—	4.3	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
25	H-3	11	2	上遊部	坪	13.1	—	4.3	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
26	H-3	16	No5	上遊部	坪	10.3	—	6.1	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
27	(H-3)	12	1	中游部	稻分	—	—	—	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
28	H-3	6	1	中游部	稻	(14.6)	—	5.9	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
29	(H-3)	14	1	中游部	稻	10.9	—	2.8	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
30	H-3	■	No5	中游部	稻	8.8	4.1	10.2	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
31	H-2	12	No10	上遊部	坪	(2.1)	—	(11.5)	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
32	H-3	8	No4	上遊部	小切葉	13.7	—	14.4	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
33	H-3	8	No3	上遊部	稻	11.3	—	13.7	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
34	H-3	5	W/T	上遊部	小切葉	(14.8)	—	(9.4)	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
35	H-3	8	No2	上遊部	稻	17.1	—	15.9	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
36	H-3	—	—	上遊部	奥	(25.6)	—	—	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
37	H-3	9	2	中游部	奥	—	—	—	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
38	H-5	11	1	上遊部	坪	(12.7)	7.5	4.3	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
39	H-5	15	No1	中游部	坪	13.4	6.5	3.8	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡
40	H-5	6	W/T	中游部	坪	—	7.9	—	触角	（2.2）触角	口渡：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡	触角：触角+口渡

井田番号	通称名	区	帶	標高	距離	法面(度)	傾斜	断面(度)	外因	成・整形技術の特徴		備考
										内因		
41	H-5	9	1	通直路	坪	—	0.25	—	断元(内:底地 外:底地)	断面(2/2)	断面(2/2)	無駆動型、底面削除型、切引型。
42	H-5	11	Mc2	通直路	面	(11.7)	—	(2.25)	断元	断面(1/2)	断面(1/2)	無駆動型。
43	H-5	11	Mc3	上通路	溝	(14.4)	—	(7.22)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、上端部と斜面が斜面を打つ。傾斜部で、傾斜部削除型。
44	H-5	11	2c3	上通路	溝	(2.0)	—	(0.03)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。(内因)。
45	H-5	7	Mc4	通直路	溝	—	(2.1)	—	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。
46	H-6	D1	D1	通直路	坪	12.4	7.2	2.9	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
47	H-6	4	2	上通路	小切引	(1.18)	—	(0.2)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。
48	H-6	Mc2	Mc2	上通路	溝	(19.9)	—	(18.0)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。底面(内: 外:底地)
49	H-6	Mc3	Mc3	上通路	溝	20.1	—	(7.20)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。
50	H-6	D1	Mc1	上通路	溝	(0.08)	—	(0.61)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/4)	断面(1/4)	上通路側で、傾斜部削除型。
51	H-6 (Mc1)	2	1	通直路	平場	—	—	—	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
52	H-7	12	1	上通路	坪	(12.2)	(17.4)	3.5	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。
53	H-7	9	2	上通路	坪	(14.2)	(10.6)	4.3	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。
54	H-7	12	Mc16	通直路	坪	12.3	7.2	3.8	断元(内: 外:底地)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
55	H-7	13	Mc5	通直路	坪	11.8	7.9	2.0	断元(内: 外:底地)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
56	H-7	9	3	通直路	坪	(13.9)	—	4.5	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
57	H-7	8	1	通直路	底付坪	(12.7)	—	2.6	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
58	H-7	5	2	通直路	坪	(12.0)	—	3.2	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
59	H-7	7	1	通直路	底付坪	—	7.5	—	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
60	H-7	3	1	通直路	底付坪	—	9.5	—	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
61	H-7	16	1	通直路	底付坪	—	8.6	—	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
62	(H-7) Mc1	3	1	通直路	面	(10.0)	—	(2.22)	断元(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	底面(内:底地 外:底地)
63	H-7	Mc1	上通路	溝	(19.8)	—	(32.7)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。	
64	H-7	16	3	上通路	溝	(20.4)	—	(7.20)	断面(内:底地 外:底地)	断面(1/2)	断面(1/2)	上通路側で、傾斜部削除型。

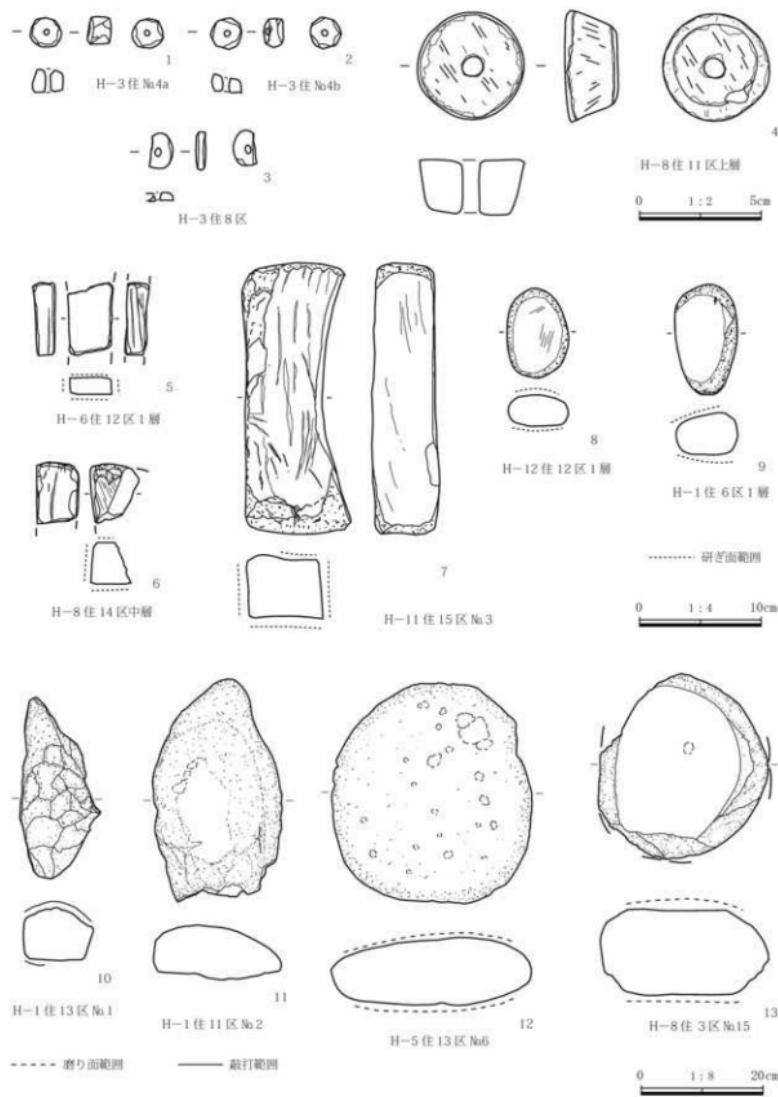
井田番号	面積(m <sup>2</sup> )	区	層	種類	岩種	法量(m <sup>3</sup> )	落落	落落	成・整形技術の特徴			内面	備考	
									上口層	底層	焼成	色調		
65 H-7 ④(1) 面 k613	2,460.00	黒	(1)3	—	0.125)	—	—	—	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
66 H-7 14 1 浅出層	黒	—	—	—	—	—	—	—	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
67 H-7 10 1 浅出層	黒	—	—	—	—	—	—	—	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
68 H-7 6 k617	浅出層	黒	—	—	—	—	—	—	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
69 H-8 A区 k610	中層	上部	上部	FF	(16.30)	—	3.8	相思	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
70 H-8 k610	上部	上部	上部	FF	11.1	—	3.5	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
71 H-8 3 k611	中層	上部	上部	FF	(12.31)	—	20.9	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
72 H-8 15 k610	浅出層	高(付)	高(付)	(18.0)	13.86	5.1	相思	口凹(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
73 H-8 k610	浅出層	高(付)	高(付)	(15.10)	11.46	4.3	相思	口凹(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
74 H-8 11 1 浅出層	黒	(14.30)	—	—	—	—	—	—	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
75 (H-8) 3 上層 浅出層	黒	13.3	5.6	2.9	相思	口凹(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
76 H-8 A区 k610	中層	浅出層	底	(10.0)	—	2.6	相思	口凹(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
77 H-8 1 k624	浅出層	底	19.14	—	3.9	相思	0.678	口凹(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
78 H-8 14 k619	浅出層	底	20.6	—	3.5	相思	0.628	口凹(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
79 H-8 12 1 浅出層	黒	(10.0)	—	—	—	—	—	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
80 H-8 11 k62	上層	上部	小窓(付)裏	(10.0)	—	12.5	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成	
81 H-8 3 7# 浅出層	小窓(付)	小窓(付)	12.1	—	(8.61)	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
82 H-8 11 2 上部	黒	—	—	—	—	—	—	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
83 H-8 k605	上部	黒	22.6	—	32.5	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
84 H-8 k623	上部	黒	24.0	—	37.6	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
85 H-8 k623	上部	黒	23.8	—	35.6	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成
86 H-8 k623	上部	黒	22.3	7.3	20.9	相思	口凹(水)	口凹(水)	口凹(水)	口凹(水)	焼成	白色	焼成	焼成
87 H-8 A区 k616	下層	土	(21.86)	黒	(25.0)	相思	相思	相思	口凹(水)・窓(水)	口凹(水)・窓(水)	焼成	白色	焼成	焼成

井田番号	通称名	区	帶	緯度	經度	口道	底質	水深(m)	成・整形成長の特徴		備考
									内面	外面	
88 H-8	A区	下緑	上緑	東	北1.0	—	—	24.0	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
89 H-9	4	Re.12	上緑	東	—	8.8	—	—	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
90 H-11	15	Re.1	上緑	東	—	18.3	—	—	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
91 H-11	■	Re.1	上緑	東	—	21.0	—	7.5	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
92 H-12	12	2	上緑	東	Re.1.0	—	3.0	—	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群・礁石 二種群・礁石群・礁石	二種群が共存で、礁石群・礁石が内側に。 二種群が共存で、礁石群・礁石が外側に。
93 H-12	11	Re.6	上緑	東	—	11.2	—	3.1	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群・礁石が内側に。 二種群が共存で、礁石群・礁石が外側に。
94 H-12	9	1	上緑	東	—	11.3	—	4.0	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
95 H-12	8	1	上緑	東	—	11.2	—	3.4	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
96 H-12	6	Re.7	上緑	東	—	11.0	—	4.5	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
97 H-12	15	Re.2	上緑	東	—	11.4	—	4.1	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
98 H-12	11	1	上緑	東	—	11.0	—	3.6	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
99 H-12	16	Re.2	上緑	東	—	14.5	—	5.5	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群・礁石が内側に。 二種群が共存で、礁石群・礁石が外側に。
100 H-12	7	2	上緑	東	—	11.0	—	3.6	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
101 H-12	12	1	上緑	東	—	12.3	—	12.3	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
102 H-12	4	1	上緑	東	—	22.2	—	6.2	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
103 H-12	5	2	上緑	東	—	16.3	—	—	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
104 H-12	9	1	上緑	東	—	12.9	—	6.0	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
105 H-12	9	2	上緑	東	—	—	—	—	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
106 H-12	2	2	上緑	東	—	—	—	—	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。
107 A区 —系	—	Re.5	上緑	東	—	14.0	—	2.8	内：礁石 外：礁石	二種群・礁石群 二種群・礁石群	二種群が共存で、礁石群が内側に。 二種群が共存で、礁石群が外側に。

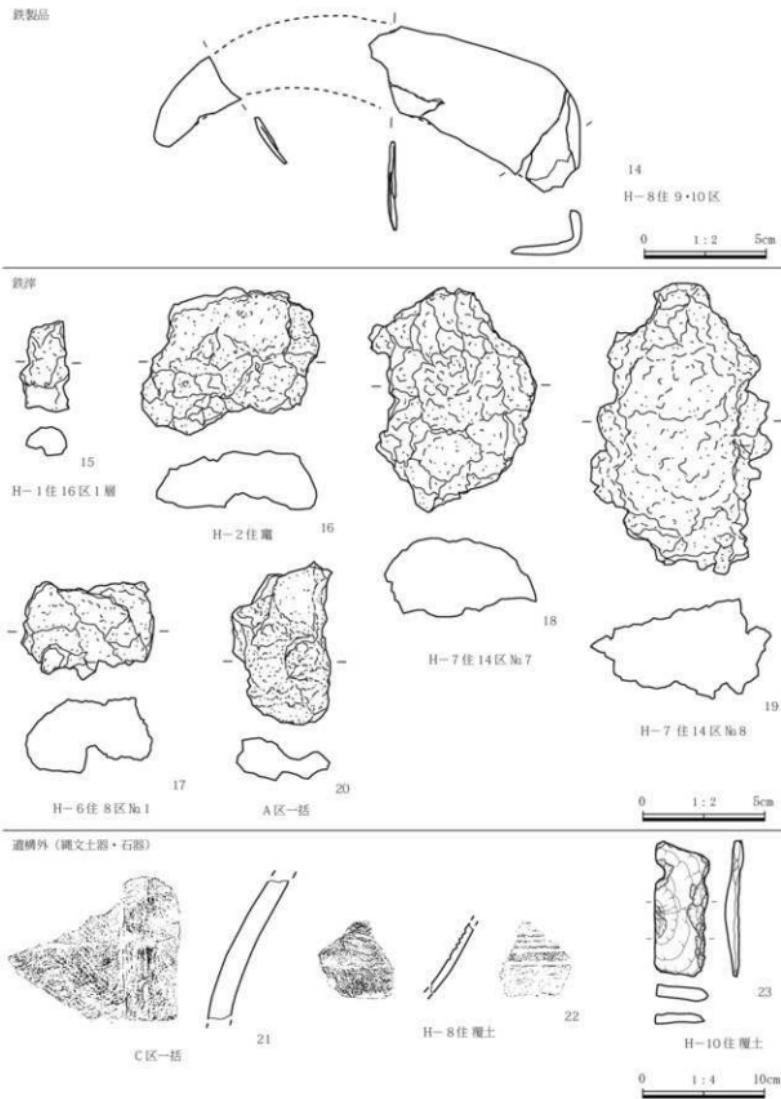
凡例 全帶当りの通称は、裏より上方に表示した。「内面」は礁石帯の内側、底質は礁石地帯、「外面」は礁石帯の外側、底質は礁石地帯。

※ 帯記号について、地図部の場合は、「A区」は断面地図、底質部の場合は、「Re.」は断面地図、「—系」は断面地図。

( ) : 植生記  
( ) : 開拓記  
( ) : 深度記



第29図 石製品・石器



第30図 鉄製品・鉄滓・縄文時代遺物

第5表 石製品・石器観察表

種別 番号	遺構名	区	層	その他	器種	石材	欠損	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	H-3			No4a	臼玉	滑石(白)		12.97	11.82	9.64	2.5	研磨、穿孔。
2	H-4			No4b	臼玉	滑石(白)		12.64	12.34	7.52	1.9	研磨、穿孔。
3	H-5			一括	臼玉	滑石(白)	○	15.32	(9.12)	3.46	<0.8	研磨、穿孔。
4	H-8	11	上		筋跡車	滑紋岩 (鐵沢石)		44.29	43.59	22.06	55.0	断面逆S形。全面研磨。穿孔。
5	H-6	12	I	H-6住	砥石	滑紋岩 (鐵沢石)	○	<57.48	36.56	17.04	<57.9	研ぎ面は4面。側面に研ぎ溝。
6	H-8	14	中		砥石	滑紋岩 (鐵沢石)	○	<47.44	<39.37	33.31	<72.3	研ぎ溝面多数。
7	H-11			No3	砥石	滑紋岩 (鐵沢石)		218.90	85.11	53.48	1,551.3	研ぎ面は4面。研ぎ溝面多数。
8	H-12	12	I		砥石	滑紋岩 (鐵沢石)		71.06	51.25	24.43	126.3	研ぎ面は2面(表面)。磨石状。
9	H-1	6	I		砥石	滑紋岩 (鐵沢石)		88.62	51.55	32.83	214.8	研ぎ面は2面(表面)。端部に敲打痕。
	H-2	9	2	No18	編物石	安山岩		190.00	79.00	66.00	1330.0	大形塊。
	H-3	16	2	No12	編物石	安山岩		137.00	72.00	42.00	760.0	
	H-5	14	2	No5	編物石	安山岩		190.00	70.00	57.00	1280.0	
	H-8	6	3	No11	編物石	安山岩		145.00	64.00	39.00	600.0	
	H-8	8	3	No21	編物石	安山岩		107.00	45.00	35.00	360.0	
	H-8	11	3	No7	編物石	安山岩		112.00	69.00	35.00	470.0	
	H-8	11	3	No8	編物石	安山岩		120.00	59.00	53.00	570.0	
	H-8	11	3	No12	編物石	安山岩		127.00	52.00	40.00	400.0	
	H-8	12	3	No3	編物石	安山岩		114.00	61.00	31.00	330.0	
	H-8	12	3	No4	編物石	安山岩		123.00	60.00	47.00	630.0	
	H-8	12	3	No5	編物石	安山岩		133.00	63.00	42.00	580.0	
	H-8	12	3	No6	編物石	安山岩		114.00	72.00	31.00	460.0	
	H-8	12	3	No23	編物石	安山岩		129.00	44.00	41.00	360.0	
	H-8	12	3	No33	編物石	安山岩		146.00	78.00	47.00	790.0	
	H-8	13	3	No31	編物石	安山岩		120.00	64.00	29.00	420.0	
	H-8	14	3	No30	編物石	安山岩		144.00	77.00	42.00	740.0	
	H-8	15	3	No14	編物石	安山岩		99.00	51.00	42.00	370.0	
	H-8	16	3	No1	編物石	安山岩		153.00	58.00	44.00	560.0	
	H-8	16	3	No2	編物石	安山岩		124.00	73.00	32.00	470.0	
	H-8			電 No2	編物石	安山岩		114.00	53.00	38.00	390.0	
	H-8			電 No3	編物石	安山岩		122.00	42.00	47.00	340.0	
	H-8			電 No20	編物石	安山岩		120.00	53.00	53.00	440.0	
	H-8			電 No22	編物石	安山岩		118.00	57.00	44.00	430.0	
	H-8			一括	編物石	安山岩		155.00	79.00	42.00	850.0	
	H-8	15	3		編物石	安山岩		75.00	43.00	24.00	105.0	
	H-12	8	1		編物石	安山岩		147.00	84.00	34.00	690.0	安山岩5点。大きさの平均は、長さ123.4cm、幅69.4cm、厚さ39.6cm、重量552gである。
	H-12	11	2	No3	編物石	安山岩		85.00	69.00	36.00	300.0	
	H-12	11	2	No4	編物石	安山岩		156.00	57.00	43.00	680.0	
	H-12	4	D-1	No13	編物石	安山岩		105.00	74.00	41.00	490.0	
	H-12	6	D-2	No10	編物石	安山岩		124.00	63.00	44.00	600.0	
10	H-1	14	2	No1	台石	安山岩		298.00	132.00	86.00	3,800.0	棒状塊。表面敲打痕多数。裏面の縁辺に敲打痕。
11	H-1	11	2	No2	台石	安山岩 (牛伏砂岩)	○	<365.00	211.00	87.00	7,700.0	扁平椎円錐。片面に磨り面。
12	H-5	13		No6	台石	安山岩		36.00	327.00	110.00	16,900.0	扁平円錐。両面に磨り面(使用面)。
13	H-8			電No5	台石	安山岩	○	<309.00	279.00	138.00	16,500.0	扁平円錐。両面に磨り面(使用面)。
	H-10	5	I		台石	安山岩	○	<126.53	<77.16	78.69	<1,219.2	縦面に使用痕(磨痕)。
	H-8			電No24	不明	安山岩		211.12	94.53	59.23	1,996.8	楕円形。表面に使用痕(磨痕)あり。砥石の可能性。

凡例 &lt; &gt; : 残存値

第6表 鉄製品観察表

種別 番号	遺構名	区	層	その他	器種	欠損	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
14	H-8	9-10			鉄譲	○	<177.11	39.88	7.26	<73.0	先端部と基部残存。
15	H-1	16	I		鉄浮	-	35.86	21.77	14.65	7.6	
16	H-2			No24	鉄浮	-	55.43	67.10	19.06	107.4	内側が内凹する。片面は穿孔する。
17	H-6			No1	鉄浮	-	40.12	53.22	21.32	79.8	
18	H-7			No7	鉄浮	-	89.21	68.66	28.82	209.8	全面が焼焦。
19	H-7			No8	鉄浮	-	114.24	71.58	36.88	292.6	
20	A55			一括	鉄片	-	63.67	43.46	19.27	66.6	内溝し、径15mm程の凹みがある。
A55		上層			鉄片	○	<27.52	<25.93	4.15	<3.5	刀子あるいは鍔等の刃部破片か。

凡例 &lt; &gt; : 残存値

## V 成果と問題点

### 鷺宮地区遺跡群の古代集落について

桜林II遺跡が存在する鷺宮地区は、古代碓氷郡の磯部郷に比定される地域である。磯部郷は、妙義山麓から東西方向へ細長く延びる横野台地と碓氷川に沿って延びる右岸の下位段丘一帯に広がる。現在の西横野地区、磯部地区の一部、東横野地区、間仁田地区に相当する範囲と推定される。これまでの調査によって磯部郷の中心地は、古墳時代後期（律令期）を含め平安時代までの住居址400軒以上が発見された新寺・大王寺地区が想定され、横野台地の牧に関係した集落として位置づけられている（大工原1994、高島2008、井上2014他）。一方、新寺・大王寺地区の集落から離れた鷺宮地区やその周辺においても同時期の集落が存在することが明らかになっている。そこで、同じ磯部郷に属する鷺宮地区的古代集落の存在意義について、発掘調査の成果をもとに考察し、まとめとしたい。

鷺宮地区遺跡群の集落は、横野台地一帯に広がる牧の東側及び咲前神社周辺で、弥生時代以降、農耕集落が継続的に形成し始めるが、特に6～7世紀にピークがあり、8世紀以降、規模が縮小しながら1世紀前半まで存続する。さらに細かくみると、集落の立地から、台地を単位とした支群が認められ、荒神平・吹上遺跡を中心とする地域、咲前神社を中心とした上ノ久保遺跡周辺地域、櫻林遺跡を中心とする地域、そして、牧及び古代道路に隣接する三本木III遺跡周辺地域の同一台地上ではあるが、それぞれ浅い谷で区切られた4つの支群が認められる。また、これらの支群の東側には、地形的に猫沢川と深い谷で区切られた台地にある9世紀後半以降を主体とする藏烟・諏訪ノ木遺跡群が存在する。上ノ久保遺跡の調査成果では、北側台地に最初の集落（弥生時代後期）が形成され、徐々に集落の中心が南側へと移っていたことが指摘されている（安中市教委1998）。9世紀以降の集落減少は、農業技術の発展、または牧経営に伴う人口増加によって集落の再編が行われ、集落の拠点が本遺跡群西の大王寺地区へと移動したと指摘されている（安中市教委1998）。また、牧に隣接する三本木II・III遺跡では、律令期の直線道路が建設され、牧の存続時期と重なる8世紀後半から9世紀代を主体とした集落が形成される（安中市教委2016）。この集落では、公的施設の可能性がある大型掘立柱建物群等が確認されている。藏烟・諏訪ノ木遺跡群では、古墳時代までの集落が多数分布しているが、8世紀以降になると集落は極端に減少する。特に9世紀前半では、集落の空白期が存在し、9世紀後半以降再び集落が形成されるといった傾向が認められる。この集落の空白期は、弘仁9年（818年）に発生した上野国一帯を襲った大地震の影響（地割れ、地滑り等による地形の変化により居住が困難となる）の可能性が考えられ、一旦、この地域から影響の少ない地域への避難措置、または集落の再編による移住を余儀なくされたこと等を反映したものと思われる。また、横野台地一帯で確認された古代牧（放牧地）との関係も本地区の集落を考える上で重要である。

この牧は、『延喜式』（927年）に記載された上野国内で推定されている9カ所の御牧（官牧）に属するものではなく、考古学的調査によって発見された遺構である。その性格をめぐっては、『延喜式』以前に存在していた牧、あるいは御牧とは別の官牧または私牧であった可能性等が指摘されている（安中市教委1994、高島2008他）。牧に関係する集落は、放牧地の区画外で形成され、8世紀代を中心とする。9世紀以降は、横野台地を下り、大王寺地区に大規模な集落を形成し、横野台地には牧に関係する施設のみが存在するようになる。鷺宮地区遺跡群の集落は、牧の東側に位置することから、これまでの

弥生時代後期以降から引き継がれた農耕集落であったものが、牧の維持管理に携さるる集落へとなり、牧の廃絶以降も咲前神社周辺で集落の中心を移動させながら存続していくものと思われる。

以上の結果から、鷺宮地区に存在する集落を3カ所の支群に大別した。

①咲前神社周辺に存在する集落（鷺宮地区遺跡群）。この集落は、時期によって居住区域内を移動しながら伝統的な農耕集落を継続的に営んでいる。

②鷺宮東部及び上間仁田地区周辺に存在する集落（蕨畑・諏訪ノ木遺跡群）。この地域では古墳時代後期（6世紀代）の集落までは継続して存在するものの、その後は集落の空白期が長く続き、再び9世紀後半以降から集落が形成される。これは、律令制度の「郷里制」に伴う集落の再編あるいは弘仁9年（818年）の地震により、この地域一帯に大きな影響があったことが、集落の断絶の要因となった可能性が考えられる。

③牧の放牧地の東側区画の外側に存在する集落（三本木Ⅲ遺跡周辺）。この地域の集落は、これまでの農耕集落とは異なり、牧に関わった集落へと変容し、牧の衰退とともに集落の役割も終え、再び、鷺宮地区遺跡群へと集落は移動（吸収）し、再編されたと考えられる。

この3点から言えることは、鷺宮地区的集落は、弥生時代後期以降から継続する農耕を中心とした伝統集落としてではなく、牧の存在によって碓氷郡において重要な役割を担う集落、つまりは磯部郷を構成する重要な役割をもった集落の一つであったと考えられる。これは、この地域に咲前神社を鎮座させた理由に大きく関与していたことからも言える。今後は、発見された集落内での評価だけではなく、牧と咲前神社の存在を視野に入れて集落を分析していく必要があろう。

#### 参考文献

- 安中市誌編纂委員会 1964 「安中市誌」  
坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』第24号 群馬県史編さん委員会  
安中市教育委員会 1994 「中野谷地区道路群」  
安中市教育委員会 1995 「荒神平・吹上遺跡」  
安中市教育委員会 1996 「落合Ⅲ遺跡・平塚遺跡・三本木Ⅱ遺跡・三本木Ⅲ遺跡」  
安中市教育委員会 1998 「上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ヶ遺跡」  
安中市誌刊行委員会 2001 「安中市史」第4巻 原始古代中世資料編  
桜岡正信 2003 「武藏型壺について」『高崎市史研究』第17号 高崎市史編さん専門委員会  
安中市埋蔵文化財発掘調査団 2005 「下原・賽神遺跡」  
安中市埋蔵文化財発掘調査団 2005 「蕨畑遺跡」  
安中市埋蔵文化財発掘調査団 2006 「蕨畑Ⅱ遺跡」  
高島英之 2008 「上野国の牧」『牧の考古学』高志書院  
安中市埋蔵文化財発掘調査団 2009 「道前久保Ⅲ遺跡」  
安中市埋蔵文化財発掘調査団 2011 「下原・賽神Ⅱ遺跡」  
安中市教育委員会 2014 「西柳野東部地区道路群」  
安中市教育委員会 2016 「落合Ⅲ遺跡2・平塚遺跡2・三本木Ⅱ遺跡2・三本木Ⅲ遺跡2」  
神谷佳明 2016 「第5章発掘調査の成果」「月夜野古窯跡群 深澤B支群」（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



桜林II遺跡 全景（南東から）



桜林II遺跡 調査区全景

図版2



図版 3



H-3号住居址 全景1



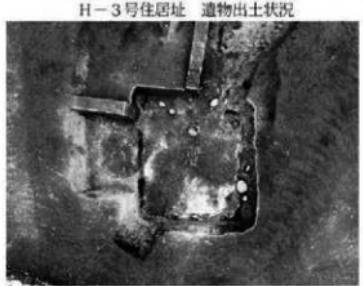
H-3号住居址 全景2



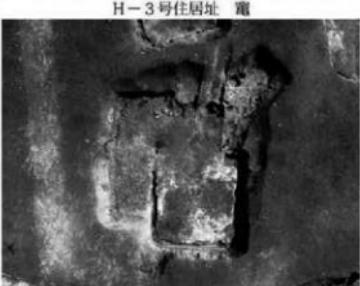
H-3号住居址 遺物出土状況



H-3号住居址 窑



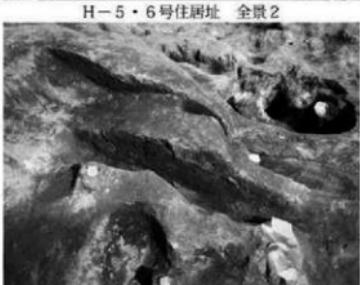
H-5・6号住居址 全景1



H-5・6号住居址 全景2

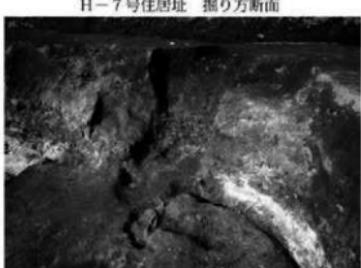
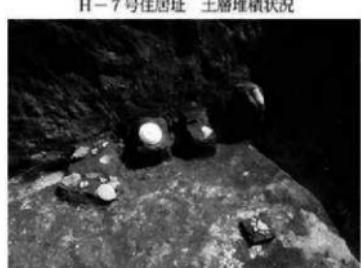
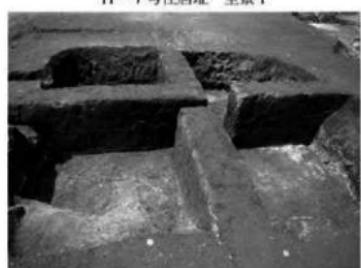


H-5・6号住居址 土層堆積状況



H-6号住居址 窑

図版 4



図版 5



H-8号住居址 土層堆積状況



H-8号住居址 挖り方断面



H-8号住居址 窯傍邊遺物出土状況



H-8号住居址 窯



H-8号住居址 窯土層堆積状況



H-8号住居址 窯袖土器埋設状況



H-8号住居址 遺物出土状況



H-8・11号住居址 切り合い関係

图版6



H-10号住居址 全景1



H-10号住居址 全景2



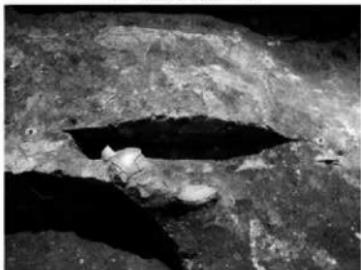
H-10号住居址 土层堆积状况



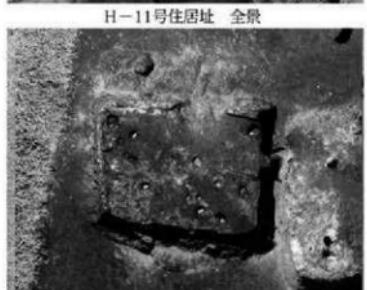
H-10号住居址 灰



H-11号住居址 全景



H-11号住居址 灰



H-12号住居址 全景1



H-12号住居址 全景2

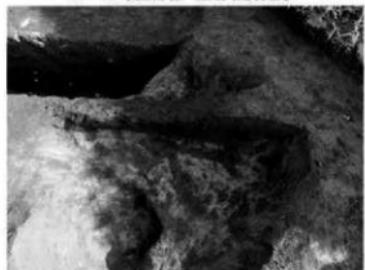
図版 7



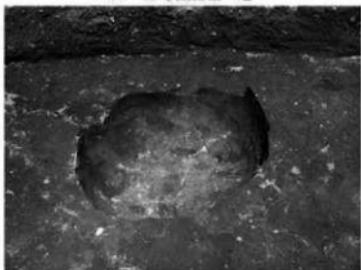
H-12号住居址 土層堆積状況



H-12号住居址 竈



D-1号土坑



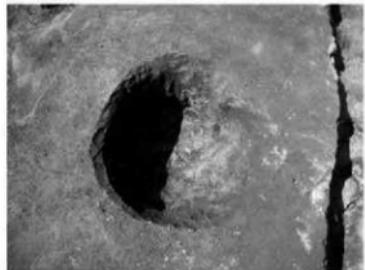
D-2号土坑



D-3号土坑



D-4号土坑



D-5号土坑



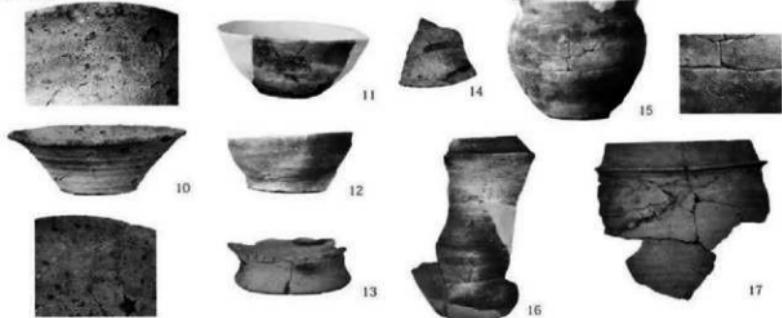
調査状況

## 図版 8

H-1号住



H-2号住

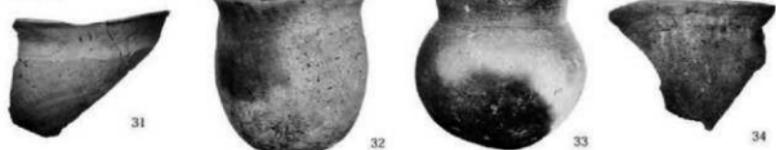


H-3号住



図版 9

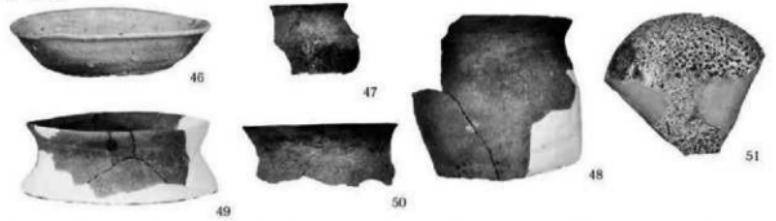
H-3号住



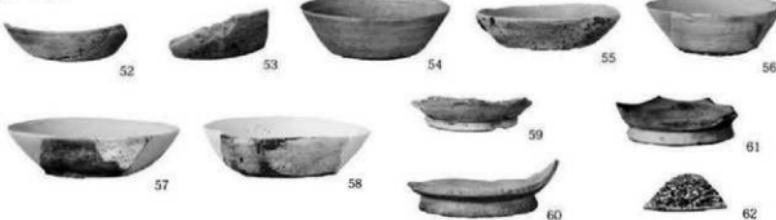
H-5号住



H-6号住

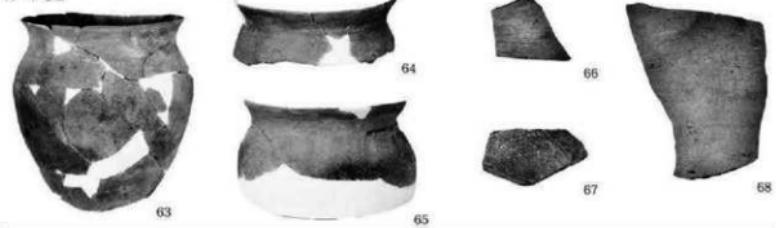


H-7号住

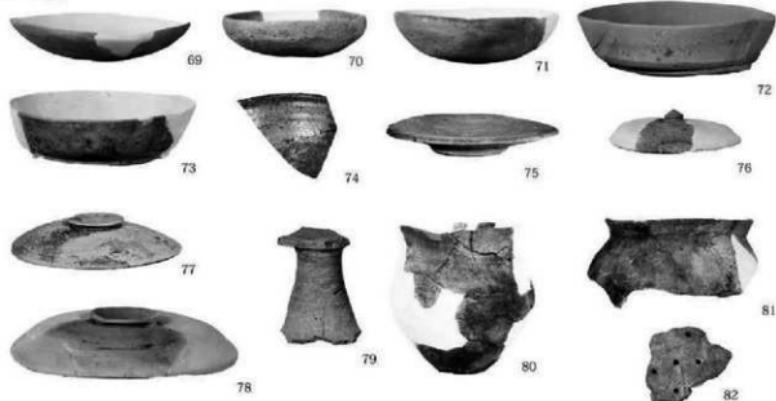


## 図版 10

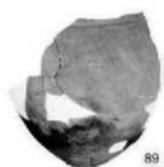
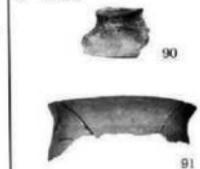
H-7号住



H-8号住

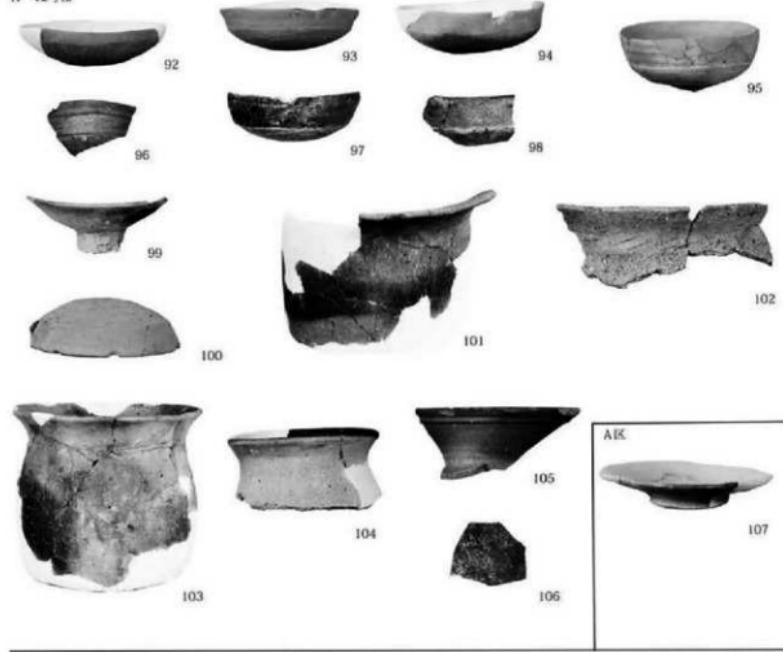


H-11号住

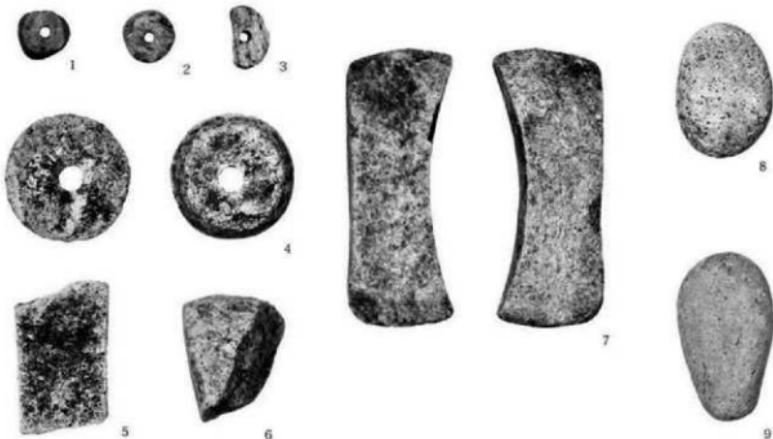


図版 11

H-12号住

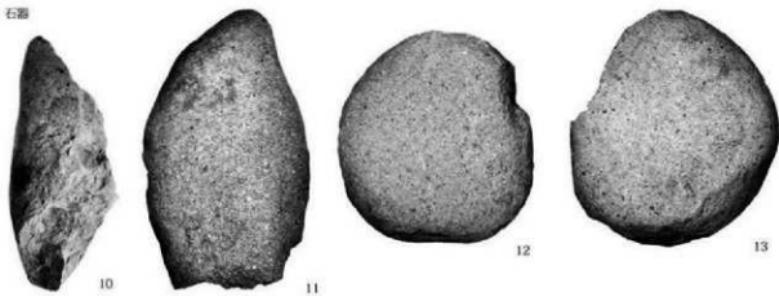


石製品・石器

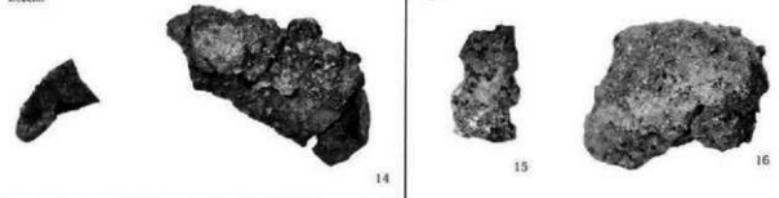


図版 12

石器



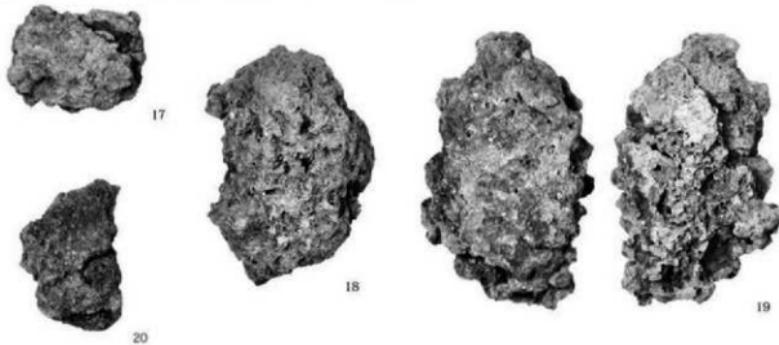
鉄製品



鉄滓



縄文時代遺物



縄文時代遺物



## 発掘調査報告書 抄録

ふりがな	さくらばやし に いせき
書名	桜林II遺跡
副書名	東横野地区学童クラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245 TEL 027-382-1111
発行年月日	西暦2017年(平成29年) 3月17日

所収遺跡名	所在地	コ一上		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
桜林II遺跡	安中市鷺宮字 桜林3150-1	102113	448 (G-50)	36° 17' 53"	138° 52' 42"	20150622 ～ 20150810	460ml	学童クラブ建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桜林II遺跡	包含層 集落	縄文 古墳 奈良・平安	遺構なし  住居址2 住居址8 土坑5 ピット8	縄文土器（前期・中期・後期）、石器  土師器（壺・瓶・甕等） 須恵器（壺・瓶・高壺・甕等） 石製品（臼玉） 石器（紡錘車・砥石・台石） 鉄製品（鎌）、鉄滓	咲前神社の南に位置する集落。西には牧が存在する。磯部郷に比定される地域の集落。 住居竈脇の小槻内から白玉が出土。 「伊」の墨書き土器、「呂（喜の異字体）」の刻書き土器が出土。 刻書き土器は、在地ではなく、北毛地域を含む他地域からの搬入品と推定。

(要約)

本遺跡では、奈良、平安時代の集落であることが判明した。周辺地域の調査から、集落規模は広範囲に及ぶものと推定され、古代磯部郷と比定される拠点的な性格をもつ集落の一つであった可能性が考えられる。

出土遺物では、「呂」と刻書のある小型甕は、底部の切り離しが左回転であるため、在地産（秋間古窯址）ではなく、月夜野古窯址群等の他地域からの搬入であった可能性がある。また、施釉土器として灰釉陶器、彩釉陶器の破片（器種不明）、平瓶破片、摘みが宝珠形をした蓋等、一般集落では出土例が少ない土器等も出土した。少数であるが鉄滓が出土していることから、集落内で製鉄あるいは鍛冶が行われた可能性がある。

桜林II遺跡周辺では、古墳時代の7世紀以降、途中、集落の減少と断続期間を挟みながらも10世紀後半に至るまで集落の継続が認められることから、横野台地一帯に展開する牧や咲前神社との関連性が考えられる。

## 桜林Ⅱ遺跡

—東横野地区学童クラブ建設工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成29年3月17日

編集・発行 安中市教育委員会  
群馬県安中市松井田町新堀245

印 刷 上海印刷工業株式会社  
群馬県前橋市天川大島町305-1